

## 3-2 1 鳥取県 × ジャマイカ

### (1) 背景と目的

#### ア 事業背景

大阪・関西万博にジャマイカが参加を正式決定したことに伴い、ジャマイカ・ウェストモアランド県（H28 姉妹提携）、駐日ジャマイカ大使館及び在ジャマイカ日本国大使館と連携した国際交流を実施することとなった。

コロナの終息に伴い、ジャマイカとの往來を伴う交流について一部は再開したものの、現地治安情勢の悪化により青少年派遣等は再開できていない。

#### イ 事業目的・目標

本県は、日本の自治体とカリコム諸国間で唯一の姉妹提携を締結しており、他自治体では体験することができない異文化交流を実施してきた。近年では、ウェストモアランド県とSDGsをテーマとした青少年交流にも取り組んでおり、ジャマイカの青少年と県内青少年が交流し、お互いの文化や自然等について情報共有することで、両地域の違いを比較し、自身の環境を見つめ直す機会を提供する事業を展開してきた。

万博の理念に照らし合わせ、このような取組を更に発展させるとともに、本事業を活用しウェストモアランド県との交流をより一層深化させることで、文化交流・学生交流・課題解決交流などを通じて両地域のグローバル化、活性化、観光振興へ繋げていく。

### (2) 事業内容

#### 1) 県民向けジャマイカ料理教室

##### 【スケジュール】

令和7年6月 参加者の公募(先着20名)

令和7年7月5日(土) 料理教室の実施

##### 【体制】

主催：鳥取県

##### 【内容】

- ・駐日ジャマイカ大使館の木村太郎シェフをお招きし、県民を対象とした料理教室を実施。
- ・小学生から70代までの20名が参加。
- ・ジャマイカを代表する料理(カレーチキン、フェスティバル)に取り組んだ。

##### 【効果】

A：自治体内への波及効果

鳥取県とウェストモアランド県の友好交流の機運醸成

B：実施により達成できた成果



参加者から、「食を通じた国際理解は年齢問わずできてよい」、「ジャマイカへ行ってみたい」、「知らない国を知るきっかけになった」などの声が寄せられ、ジャマイカを身近に感じるきっかけを提供できた。

C：相手国への波及効果

料理教室をきっかけとしたジャマイカの知名度向上や県民の異文化理解促進

2) 万博ジャマイカナショナルデーにおける日・ジャマイカ青少年交流

【スケジュール】

令和7年2月 ジャマイカを訪問し、交流内容について協議

令和7年8月6日(水) ジャマイカナショナルデー参加

【体制】

主催：駐日ジャマイカ大使館、万博協会

協力：県立岩美高等学校

【内容】

万博参加国を称えるナショナルデーにおいて、岩美高校の生徒と鳥取県が招へいしたジャマイカ青少年団がステージでコラボパフォーマンスを披露。

【効果】

A：自治体内への波及効果

日本人初のジャマイカ人 SEA であるクリスティン・デイ氏の鳥取県スポーツ国際交流員への任命式が新聞報道されたことによるジャマイカ交流の機運醸成

B：実施により達成できた成果

鳥取県とジャマイカとの友好関係を世界に発信することができた。

参加生徒が観客400名の前でパフォーマンスを披露する経験ができ、「一生の思い出になった」との感想が寄せられるなど、青少年の国際感覚涵養へ寄与した。

C：相手国への波及効果

鳥取県をはじめとする日本との友好関係の強化



### 3) ジャマイカ青少年団の鳥取県訪問

#### 【スケジュール】

令和7年8月7日(木)から9日(土)

#### 【体制】

主催：鳥取県

協力：県立岩美高等学校

#### 【内容】

・ジャマイカ青少年団と岩美高校の生徒が、SDGsをテーマとしたポスターセッションや岩美町でとれた貝殻を使用したアクセサリ制作体験により青少年同士の交流を行った。

・鳥取砂丘や砂の美術館等の視察を行ったほか、布勢運動公園でジャマイカ展示の見学や、ジャマイカ人スポーツ国際交流員であるクリスティン・デイ氏との陸上交流を行った。

#### 【効果】

##### A：自治体内への波及効果

青少年交流が地元ニュースや新聞で報道されたことによるジャマイカとの交流及びウェストモアランド県との姉妹提携の認知度向上

##### B：実施により達成できた成果

参加生徒から、「英語が苦手なので緊張したが、交流できて楽しかった」「英語をもっと学びたいと思った」との感想が寄せられるなど、語学習得や異文化コミュニケーションへの意欲向上を促進した。

##### C：相手国への波及効果

参加生徒が日本文化の体験をし、鳥取での青少年交流を通して友情を育んだ。



#### 4) 青少年ビデオ交流

※ジャマイカの現地情勢悪化により青少年派遣が中止になったことに伴う代替事業

##### 【スケジュール】

令和7年5月 青少年派遣の中止決定、代替事業としてビデオ交流を行う方針を固める

令和7年6月 交流参加校の決定

令和7年10月 撮影

令和7年11月 ビデオ完成

令和7年12月 ジャマイカ側へDVD手交

※作成したビデオレターを8月に来県した青少年団に見ていただき、返答のビデオレターを送付してもらうことを計画していたが、10月のハリケーン・メリッサで被災したウェストモアランド県が混乱状況にあることから、相手方からの返答に関しては任意とした。

##### 【体制】

主催：鳥取県

協力：県立岩美高等学校吹奏楽部

県立八頭高等学校書道部

県立米子高等学校ダンス部

##### 【内容】

ジャマイカ交流に取り組んできた高校による、日本の文化や部活動を紹介するビデオメッセージ作成

- ・岩美高校：有志生徒による英語での学校紹介、吹奏楽部による「One Love」等の演奏
- ・八頭高校：書道部による日本とジャマイカの交流発展を願う書道パフォーマンス
- ・米子高校：ダンス部によるパフォーマンス

##### 【効果】

###### A：自治体内への波及効果

情勢の悪化により生徒のジャマイカ派遣が難しい中、ビデオ交流によって草の根交流を続けることができた。

###### B：実施により達成できた成果

ビデオ交流をきっかけに、先輩が見つないできたジャマイカ交流の歴史を調べてみたり、現地のパトワ語を調べてビデオ内で使ってみたりする等の生徒の積極的な姿勢が見られた。

###### C：相手国への波及効果

8月に来県した際に交流した岩美高校生徒からのメッセージや、八頭高校及び米子高校の部活動紹介を通して、鳥取との友好関係を実感してもらい、今後の交流につなげていく。



### (3) 事業の目標に対する成果

- ・コロナ禍で往来を伴う交流が中断となっていたが、万博国際交流プログラムを活用し、ジャマイカ青少年団を受け入れることができ、交流を一部再開することができた。
- ・姉妹提携 10 周年に向けて、県内での機運醸成をはかることができた。
- ・鳥取県とウェストモアランド県が姉妹提携していることや高校間の姉妹校締結について、テレビや新聞報道、イベント等を通じて多くの方に知っていただくことができた。
- ・県民のジャマイカ文化及び多文化共生社会への理解を促進することができた。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

ジャマイカ文化体験や青少年交流を通して、県内高校生の異文化への理解を促進するとともに、草の根レベルでの青少年交流を続けていく。

### (5) 参加者にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

- ・青少年交流を通じて友情を育み、お互いの言語を勉強するきっかけになった。
- ・英語や国際交流に興味を持つきっかけとなった。

### (6) 特に良かった点、苦労した点

#### 【良かった点】

- ・ジャマイカ文化に興味をもつ県民が多くいること
- ・ジャマイカとの交流を機に英語や国際交流に興味を持つ生徒がいること

#### 【苦労した点】

- ・ジャマイカの治安情勢及び現地との連絡調整

## (7) 今後の展開予定

今後の展開内容

鳥取県・ウェストモアランド県姉妹提携10周年（令和8年/2026年）に向けて、ウェストモアランド県及び駐日ジャマイカ大使館、在ジャマイカ日本国大使館と連携し、交流の深化に向けた事業を実施する。

## (8) 今後の課題

ジャマイカの治安情勢（外務省発表：レベル2）

## 3-2 2 広島県北広島町 × ドミニカ共和国

### (1) 背景と目的等

#### 1) 背景・目的

今回、交流先に選んだドミニカ共和国とは、2020年東京オリンピック実施の際ホストタウンで柔道選手の事前合宿を受け入れたことをきっかけに、オリンピック終了後も継続した交流が行われている。今回、ドミニカ共和国が万博への参加を表明され、より密接な交流を行いたいという課題があったため、昨年度に引き続き今年度も本プロジェクトへの参加を希望した。

万博を契機として、ドミニカ共和国と更なる交流を行うことで、北広島町の児童生徒にとって野球や柔道などにおけるトップアスリートとの交流機会の創出を行うこと、また北広島町とドミニカ共和国の間の親睦をより深めることを目的としている。

#### 2) 目標

現地関係者を招待し、町内文化施設の案内・壬生の花田植や神楽などをみていただくなど、海外の方に対し広く町文化を周知することで、情報発信や町内の宿泊施設利用に伴う経済効果の期待も目標としているほか、北広島町の児童生徒との交流機会の創出することで、児童生徒にとっての見分を深め、その中でも、トップアスリートとの交流では、知識を深めることを目標としている。

### (2) 事業内容

#### 1) 大阪・関西万博 ドミニカ共和国 ナショナルデーへの参加

ドミニカ共和国との交流実績のある芸北中学校生徒8人、また2025年2月に実施した万博国際交流プログラム「異文化について学ぼう！」に参加した高校生5人と、大阪・関西万博のドミニカ共和国ナショナルデー（2025年8月23日(土)）を訪問し、ドミニカ共和国と北広島町の関係についてプレゼンテーションを行うとともに、ナショナルデーステージで行われたドミニカ共和国の文化発表（ダンス）を観覧した。

##### ①スケジュール

R7.4～ 駐日ドミニカ共和国大使館へイベント実施について協議

R7.8～ 博覧会協会より、午餐会招待があり協議

R7.8.23～ イベント実施

##### ②体制

駐日ドミニカ共和国大使館（実施における連絡調整）

北広島町（計画、調整、引率等）

③内容（日時、場所、参加者）

日時：令和7年8月23日（土）

場所：大阪・関西万博 コモンズB館センターステージ、ナショナルデーホール

参加者：芸北中学校3年生8人、加計高等学校芸北分校4人、千代田高等学校1人

北広島町長、北広島町議会議長 ほか

④効果 A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

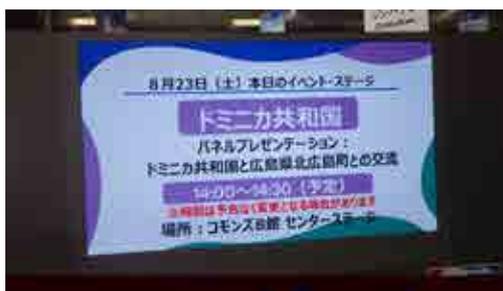
A:生徒、保護者等関係者への事業告知、またナショナルデー参加についての広報を町ホームページでの周知及び全戸配布することで、ドミニカ共和国との交流について改めて町民全体に関心を持っていただくことが出来た。

B:参加した生徒は、プレゼンテーションで自らが発表することでドミニカ共和国のことをより身近に感じることが出来、またパビリオンスタッフと交流することで交流機会を創出出来た。

また、当日会場を訪れた方に対しても、北広島町の取り組みについて周知することが出来た。

C:ドミニカ共和国のナショナルデーで実施することで、駐日ドミニカ共和国大使館以外のドミニカ共和国からの来日者に向けても、ドミニカ共和国と北広島町の取組について周知することが出来た。また、午餐会に町長・議長が出席したことで、国賓の方に向けても周知することが出来た。

【当日の写真】



## 2) 東京 2025 世界陸上競技選手権大会 ドミニカ共和国出身選手応援実施

2020 年東京オリンピックホストタウンで交流のあった陸上競技において、ドミニカ共和国の選手が東京 2025 世界陸上競技選手権大会へ出場することから、町内高等学校 2 校の陸上部生徒が会場である国立競技場を訪問した。ドミニカ共和国の陸上競技選手の応援を行うとともに、町内高等学校陸上部生徒にとってトップアスリートの大会を間近で観ることで、知識を深めるきっかけを創る。また、翌日には、駐日ドミニカ共和国大使館を訪問し、観覧の感想をドミニカ共和国公使へ伝え、生徒に向けて激励をいただく。

### ①スケジュール

R7.6～ 町内高等学校 3 校に、事業概要について周知、参加意向の確認

R7.7～ 在ドミニカ共和国大使館を通じて、ドミニカ共和国陸上連盟に町長名で挨拶文送付

R7.8～ ドミニカ共和国陸上連盟コーチとの交流を行い、当日訪問し、交流したい旨伝える

町立高等学校生徒による陸上選手に向けたビデオメッセージを送付する

R7.9.18～ イベント実施

### ②体制

在ドミニカ共和国大使館（ドミニカ共和国陸上連盟との連絡に係る調整）

北広島町（計画、調整、引率等）

ドミニカ共和国陸上連盟（スケジュール調整）

### ③内容（日時、場所、参加者）

日時：令和 7 年 9 月 18 日（木）～9 月 19 日（金）

場所：国立競技場、駐日ドミニカ共和国大使館

参加者：加計高等学校芸北分校生徒 2 人、千代田高等学校生徒 6 人 ほか

### ④効果 A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

A:生徒、保護者等関係者への事業告知を行うことで、2020 年東京オリンピックを契機とした陸上競技選手との交流についても改めて周知することが出来た。

B:国立競技場では、観戦に来ていた駐日ドミニカ共和国大使、公使と交流することが出来、大使からはドミニカ共和国のスポーツの現状についてもお話いただくとともに、応援にあたり感謝の言葉をいただいた。駐日ドミニカ共和国大使館では、大使は公務のため対応が難しく公使に対応していただき、生徒は観戦について感想を延べ、公使からは観戦を今後の自身の陸上活動に活かして欲しいとの言葉をいただいた。参加した生徒は、トップ

アスリートの競技を間近で見ることが出来たこと、またドミニカ共和国の方と交流する機会が持てたことで、同国をより身近に感じることが出来た。

C:ドミニカ共和国陸上連盟の代表が2020年東京オリンピックの時から交替していたことから、改めてドミニカ共和国と北広島町との交流について伝えることが出来た。陸上連盟からは、応援への感謝とともに、応援いただいたことを内部で共有すると言葉をいただいた。

#### 【当日の写真】



### 3) ドミニカ共和国万博関係者交流

○大阪・関西万博でドミニカ共和国のパビリオンを運営されていた方を北広島町へ招待し、北広島町の文化施設の案内、神楽観覧、町内中高生徒との交流を行った。

#### ①スケジュール

R7.8～ 駐日ドミニカ共和国を通じて、事業要旨について伝え、参加者の確認を行う

R7.9～ 町内中学校、高等学校、文化施設等に事業要旨を伝え、協力を要請する

R7.10～ 通訳をお願いしている方との事前打ち合わせ

R7.10.15～ イベント実施

#### ②体制

駐日ドミニカ共和国大使館（万博関係者との連絡に係る調整）

北広島町（計画、調整、引率等）

#### ③内容（日時、場所、参加者）

日時：令和7年10月15日（水）～10月17日（金）※最終日は移動日

場所：10月15日（水）芸北中学校・加計高等学校芸北分校

芸北高原の自然館

加計高等学校芸北分校

10月16日（木）北広島町役場

芸北民俗芸能保存伝承館、北広島町まちづくりセンター、

戦国の庭歴史館、豊平地域づくりセンター

参加者：ドミニカ共和国 国際渉外担当、パビリオンスタッフ ほか

④効果 A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

A:中学校、高等学校生徒との交流については、地方新聞、民放等で広く周知し、町民からも声をかけていただいた。町内施設を複数見学していただくことで、町民との交流をすることが出来、ドミニカ共和国に興味を持っていただくことが増えた。

B:ドミニカ共和国について、また万博について中学校、高等学校の生徒に広く周知することが出来、また国際交流の経験があまりない生徒にとっても交流の機会を創ることが出来た。万博関係者に対しては、北広島町の文化・文化施設の見学、体験を行っていただくことで、北広島町についてより知っていただくことが出来た。

C:例年、ドミニカ共和国との交流は、大使館の方を中心として行っていたが、今回ドミニカ共和国政府（国際渉外担当/万博担当者）をお招きすることが出来たことで、より国内の方への周知が出来たものと考えられる。

【当日の写真】



4) ドミニカ共和国出身カープ選手による野球教室

ドミニカ共和国出身の広島東洋カープ選手（カープアカデミー来日選手5人等）を北広島町に招き、小学校・義務教育学校児童を対象とした野球教室を実施した。

①スケジュール

R7.4～ 広島東洋カープに対して、事業概要について伝え、協力を要請する

R7.10～ 実施内容について、広島東洋カープと連携して作成する

R7.11～ イベントの広報を行い、募集を開始する

R7.11.23～ イベント実施

②体制

広島東洋カープ（事業計画にたいする助言、選手調整等）

北広島町（計画、調整、進行等）

③内容（日時、場所、参加者）

日時：令和7年11月23日（日）

場所：KumahiraPark 北広島

参加者：広島東洋カープ所属ドミニカ共和国出身選手 7人

広島東洋カープ職員・通訳 2人

町内小学校・義務教育学校児童及び町内野球チーム所属児童 18人 ほか

④効果 A:自治体内への波及効果、B:実施により達成できた成果、C:相手国への波及効果

A:広島東洋カープのドミニカ共和国出身選手との交流については、2020年東京オリンピックを契機に継続して行っており、万博国際交流プログラム事業として広島東洋カープとの連携は2年目となるため、町内への波及は出来ており、事業についても好評である。

B:今回参加した児童は野球初心者から経験者まで幅広い層が参加されており、児童に対しての国際交流の機会に加え、プロの選手から教わる経験を創出することが出来た。

C:ドミニカ共和国にあるカープアカデミーの育成選手として日本に来日される選手との交流を計画していることから、北広島町とドミニカ共和国（カープアカデミー）のつながりの継続について周知することが出来た。

【当日の写真】



### (3) 事業の目標に対する成果

【アンケート結果】※ナショナルデー参加生徒（10名／13名）回答から

- ① 満足度について 非常に良かった 70% 良かった 30%
- ② 今後同様の事業があった際に友人等に参加を進めるか  
ぜひ勧める 60% 勧める 20% どちらともいえない 20%
- ③ 今回のイベントに参加しようと思ったこと、期待したことについて（上位3点） ※  
複数回答  
ドミニカ共和国に興味があった 70%  
大阪・関西万博に興味があった 60%  
国際交流に興味があった 50%
- ④ 期待したことについて、結果として得られたか  
期待以上のことが得られた 60%  
期待通りだった 10%  
わからない 20%  
得られなかった 10%

1) ナショナルデーの訪問人数は、当初計画していた5人から大幅に増やすことができ、中高生合わせて13人訪問することが出来た。また、博覧会協会から招待いただき、午餐会へ北広島町長、北広島町議会議長が出席することで、ドミニカ共和国内関係者に対して北広島町との交流について広く周知することが出来た。

2) 世界陸上への応援については、町内の高等学校3校の陸上部生徒に声かけを行ったうち、2校の生徒が参加することとなった。人数は当初の予定より増え8人参加することとなり、参加する生徒のうち6人の生徒は自ら文章を考え選手に向けたビデオメッセージを送った。選手からは応援に対する御礼があり、当日の面会についても事前に決めていたが、当日選手の検査や天候の関係から終了時間が深夜になる見込になったため、テキストメッセージでの交流となった。実際に世界レベルの陸上選手の競技を間近で見ることで、知識を深めることが出来、その後の競技へ向かう姿勢にも好影響を与えることが出来た。

3) ドミニカ共和国万博関係者の来場人数は計画より少なく2人となったが、交流人数は中学校、高等学校の約40人と交流することが出来た。また、地域の文化施設の見学や神楽面づくり、藍染体験、甲冑試着体験等には、地域住民の方とも交流することで、改めて町内に対しても交流について周知することが出来た。あわせて関係者に北広島町の無形文化財である神楽、壬生の花田植についての体験活動や説明を行いより北広島町を知っていただくことが出来た。

4) 野球イベント参加人数は当初の目標の15人より多く18人の参加となった。参加した中にはドミニカ共和国の方と初めて交流する児童もおり、改めて海外交流を行うことで見

童にとっての見分を深めることが出来た。また、野球についてトップアスリートとの交流機会を創出することで、知識を深めることも出来た。

#### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価) )

・以前から交流のあるドミニカ共和国ではあったが、昨年度に続き今回も対面で交流することが出来、周知したことで、以前にも増してドミニカ共和国について町民に対して関心を持っていただくことが出来た。万博国際交流プログラム事業としては今年度が最終年度となるが、来年度以降も、継続して交流が出来るよう、交流内容を精査しながら取り組みを行っていききたい。

#### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

・ナショナルデーの訪問については、2020年東京オリンピックでドミニカ共和国の方と交流実績のある中学校生徒、また2025年2月に開催した異文化について学ぶイベントの参加者が訪問したため、ある程度国際交流について興味がある、知っている生徒の参加であったものの、実際に参加したことで「もっとドミニカ共和国の方と交流したい」「国際交流の大切さに気づいた」「ドミニカ共和国の文化についてより知ることが出来た」などと国際交流により興味を持たせる効果があった。また、同時にプレゼンテーションでは北広島町のことについても説明することで、ふるさとに対して愛着を持たせることが出来た。

・万博関係者と交流した中学校・高等学校の生徒は、将来のことについて考えるきっかけになった生徒が多く、「語学勉強を頑張りたい」「たくさんの言語を話せるようになりたい」「今後の人間関係につなげていきたい」「海外の国に興味をもった」といった感想も聞くことが出来た。海外の方と対面で交流することで得られた経験がとても大きかったことがうかがえた。

・ドミニカ共和国出身カーブ選手による野球教室では、参加した児童皆大好きな広島東洋カーブの選手から直接指導を受けることで、野球への関心、向上心、地元球団への愛着が大いに増し、保護者も次回の開催を楽しみにされている。

#### (6) 特に良かった点、苦勞した点

##### 1) 良かった点

ドミニカ共和国のナショナルデーに参加したことで、ドミニカ共和国と北広島町の取り組みについて来場された多くの方に周知することが出来たこと、また参加した生徒にとっても改めてドミニカ共和国の文化や歴史に触れ発表することで、より興味を示すことができたことは大きな成果であった。

##### 2) 苦勞した点

ドミニカ共和国の方と交流することで苦労した点については、ドミニカ共和国の母国語がスペイン語であることである。ドミニカ共和国の方と話をする際、町担当者が英語なら会話が出来る程度だったため、英語を話すことが出来るドミニカ共和国の方としか会話では交流が出来なかった。昨年度からの継続した点だったため、今年度は対面やオンライン交流については通訳の方に依頼する部分を設けるなどしたが、ちょっとした相談やお願いごとなどを行う場面では、直接話が出来た方がいい場面もあり、意思疎通について困難な部分もあった。

### **(7) 今後の展開**

2020年東京オリンピックを契機に交流が始まったドミニカ共和国と北広島町であるが、今後も交流を途切れさせずに継続して交流を行うこととしている。交流を行う手段については、ドミニカ共和国と北広島町では時差があるため現地学校とのビデオメッセージでの交流や、今年度も実施し好評であったドミニカ共和国出身の広島東洋カープ選手による野球教室などの実施を検討している。

### **(8) 今後の展開における課題**

限られた予算の中で行う必要があることから、出来る限り予算を抑えた計画策定が必要である。また、昨年度同様、本事業に対して多くの人員を割くことは自治体として難しいため、関係機関との連携を密にとりながら実施にあたることが重要となる。

## 3-23 徳島県上板町 × ヨルダン

### (1) 背景と目標等

#### 1. 事業背景・目的

本事業は、令和7年度内閣官房「万博国際交流プログラム」を活用し、2025年大阪・関西万博を契機として、徳島県上板町とヨルダン・ハシェミット王国との国際交流を推進することを目的として実施されたものである。上板町では、地域の子どもたちが万博や世界と直接つながる体験を重視し、文化・教育・産業を横断した国際交流に取り組んできた。

#### 2. 万博会期前からの交流の積み重ね

上板町とヨルダンは、令和6年度より内閣官房万博国際交流プログラムを活用し万博会期前の事前交流に取り組んできた。特に、徳島県を代表する伝統文化である藍染めと、ヨルダンにおける藍染め文化の共通性に着目し、文化的共鳴を軸とした交流が展開されてきた。

ヨルダンパビリオン陳列区域代表代行 Ms. Shifa Zghoul (シファ・ズグール) 氏とはオンライン交流や定例 MTG を継続して実施し、またヨルダンパビリオン館長 Mr. Ahmad Jubran (アフマド・ジョブラーン) 氏とは徳島県上板町を訪問いただいた令和6年度成果発表会への参加や子どもたちとの交流、藍染め体験等を実施してきた。具体的には、ヨルダン館スタッフおよび音楽家が着用するユニフォームへの藍染めの導入、ヨルダン館で使用するコースターを上板町立高志小学校の児童が藍染めで制作するなど、『実際に使われる文化』を通じた交流が実現している。

また、上板町とヨルダンの万博国際交流においては、大阪・関西万博テーマ事業「いのちの遊び場 クラゲ館」及び同パビリオンプロデューサーの中島さち子氏と連携して取り組んでいる。Ms. Shifa Zghoul (シファ・ズグール) 氏と中島さち子氏は、パビリオン同士の交流や、互いの国の芸術・文化等の側面において強固な信頼関係の下、多数のコラボレーションに取り組んでいる。このような関係も活用させていただき、両パビリオンへの訪問、上板町高志小学校との交流など、会期前、会期中、会期後と続く取組においては連携して取り組んで行く。

### (2) 事業内容

#### 1) 5月7日 ヨルダン・ナショナルデーへの参加

令和7年5月7日、大阪・関西万博会場において開催されたヨルダン・ハシェミット王国ナショナルデーに、上板町立高志小学校の児童が参加した。当日は、ヨルダンを国歌を高志小学校の児童が斉唱し、フセイン皇太子殿下をヨルダン館に迎える交流が行われ、皇太子殿下からも温かい反応が寄せられた。

ヨルダン国歌の伴奏は、シグネチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」プロデューサーの中島さち子氏率いる KURAGE Band の皆さんに伴奏いただいた。

### 【KURAGE Band(クラゲバンド)】

ジャズピアニストかつ大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー（シグネチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」）中島さち子が率いる多文化ミックス音楽バンド。日本、韓国、セネガル、チベットなどの音やリズムがダイナミックに絡み合います。山本能楽堂や世界のさまざまな郷土芸能とのコラボレーションライブを多く行い、五感や身体性を



を通じて伝統と革新の狭間を、即興的に響き合わせていきます。音楽や文化の揺らぎの中に光るものを求めて。

### ■KURAGE Band

[https://steam21.com/kurage\\_band/](https://steam21.com/kurage_band/)



### 2) 10月 ヨルダンパビリオン関係者の徳島訪問と展示品譲渡

令和7年10月には、ヨルダンパビリオン関係者が徳島県を訪問し、後藤田徳島県知事立ち会いのもと、ヨルダンパビリオン展示品の譲渡式が実施された。この譲渡は、大阪・関西万博を通じて築かれた信頼関係と文化交流の成果を、地域に具体的な『かたち』として残す象徴的な取組である。譲渡された展示品は、万博会期後のレガシーとして活用され、徳島県内において広く県民や子どもたちが万博と国際交流の成果に触れる機会を創出することを目的としている。

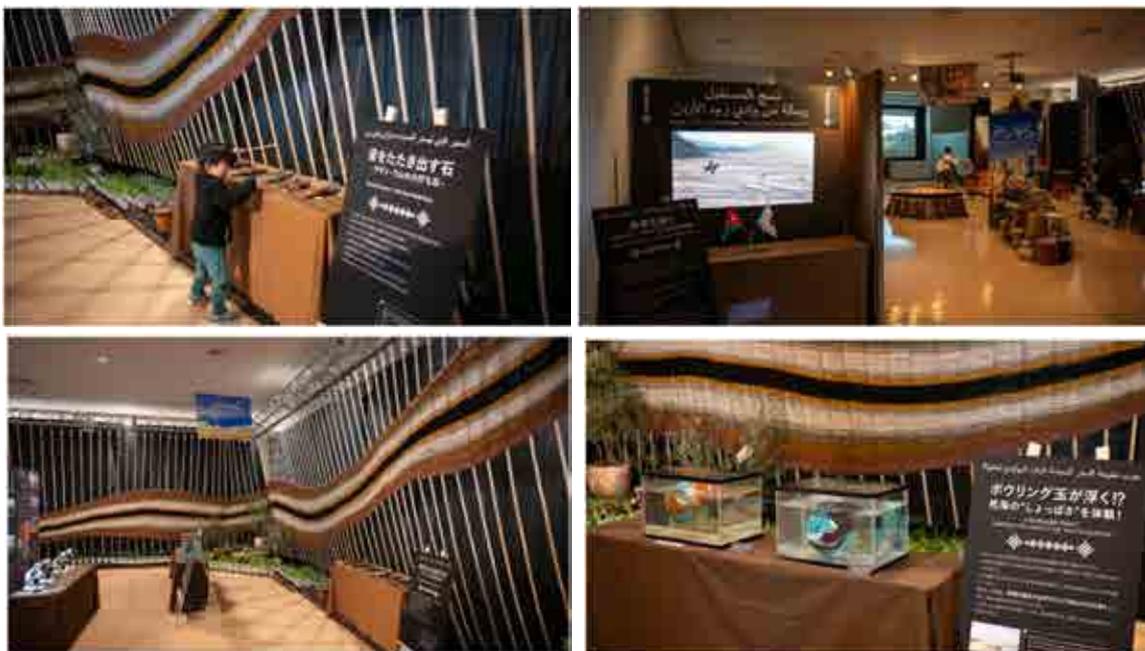
また、徳島県知事に続き、上板町 松田町長とも面会し、上板町とヨルダンの友好協定を締結した。この友好協定締結は、上板町とヨルダンの藍染め文化交流と、万博交流で築かれた交流実績が一過性のものでなく継続して関わる、互いの意思の表明であり、今後の継続交流に向けた重要な取組であると考えている。



### 3) EXPO LEGACY TOKUSHIMA ヨルダン展の開催

譲渡された展示品を活用し、あすたむらんど徳島において『EXPO LEGACY TOKUSHIMA 感謝展 in あすたむらんど徳島 「未来を紡ぐ ～ヨルダン ワディ・ラムからの手紙～」』が開催中。本展示では、ヨルダン・ワディ・ラム地域の自然・文化・歴史を紹介するとともに、大阪・関西万博を通じて生まれた国際交流のプロセスや意義を、次世代へと伝える教育的展示が行われている。これにより、万博という一過性のイベントに留まらず、地域の教育・文化施設を拠点とした継続的な国際理解の場が形成されており、自治体との継続した連携がとれている。

≪阿波ナビ(ヨルダンバビリオンが徳島県に！未来を紡ぐ ～ヨルダン ワディ・ラムからの手紙～)≫



#### 4) 12月 ヨルダン現地訪問の実施と成果

令和7年12月5日から11日にかけて、上板町および関係機関はヨルダン・ハシェミット王国を訪問し、STEAM教育、万博レガシー継承、国際連携の具体化を目的とした現地調査および協議を実施した。

本渡航では、ヨルダン政府より公式ゲストとして迎えられ、教育機関・研究機関・文化施設との協議を通じ、万博終了後を見据えた長期的な連携の方向性が共有された。

##### 【主要訪問先】

##### 12月5日(金)

##### 【政府賓客としての入国と熱烈的な歓迎】

- 18:05 クイーンアリア国際空港 到着

VIP待遇: ヨルダン政府の公式ゲストとして迎えられ、通常とは異なるVIPルートにて入国手続きが円滑に行われた。

歓迎セレモニー: 空港出口では民族音楽隊による盛大な演奏で迎えられ、予期せぬ歓待にチーム一同驚きと感動を覚えた。

出迎え: 大阪・関西万博ヨルダン館の Acting Commissioner General (CG代行) であるシーファ氏をはじめ、在ヨルダン日本大使館員の方々が出迎えてくださり、両国の強い絆を感じるスタートとなった。

##### 12月6日(土)

##### 【観光資源の体感と万博レガシー市場調査】

1. 午前: 死海 (Dead Sea) 視察・体験

場所: ヒルトン・デッドシー (Hilton Dead Sea)

内容: 実際の浮遊体験や泥パックを通じ、世界的な観光資源である死海の魅力と、現地ホスピタリティの質の高さを実地で確認した。

2. 午後: 万博レガシーに向けた市場調査

活動: アンマン市内等の小規模アートショップや死海コスメの店舗を視察。

目的: 大阪・関西万博終了後のレガシー事業として計画している「ヨルダン展」にて販売・展示可能なグッズの選定 (リサーチ) を行った。

## 12月7日 (日)

### 【アカデミアとの連携拡大：トップ校との即断即決】

1. 10:00 - 11:30 AQAC (高等教育認証・品質保証委員会)

対応者: Prof. Yousef A. Al Abdallat (President's Assistant) 他

協議: JICA に提出している申請書をベースに、四国大学や steAm Inc. との連携可能性について議論。

成果: 代表者より\*\*「提案内容は基本的にすべて実施しよう」との全面的な合意を得た。さらに、工科大学だけでなく、総合大学である「ヨルダン大学」とも連携すべき\*\*との強い推奨を受けた。



12:00 - 14:00 Jubilee School (ジュビリースクール)

- 視察: 先生方および生徒によるプレゼンテーションから開始。
- 環境: 大量の LEGO、Arduino を用いた電子工作、プロ仕様の 3D プリンターデザインなど、充実した ICT 設備を確認。
- 探究活動: ICT だけでなく、化学・生物実験や屋外の科学公園など、多角的な科学体験が可能。9 年生の STEAM カリキュラムや、生徒議会による意思決定プロセスなど、生徒の主体性を重んじる教育方針に感銘を受けた。
- 意向: 予算制約はあるものの、我々との連携を強く希望していることを確認した。



## 2. 15:00 - 17:00 ヨルダン大学 (The University of Jordan)

- 経緯: AQAC の推奨を受け、予定を変更して訪問。
- 対応者: 副学長 (Prof. Faleh Sawair)、理系担当副学長、農学部長、国際室長など主要メンバーが勢揃いで対応。
- 成果: 学生数 5 万人を擁する国内トップ校に対し、四国大学の状況や JICA 案件を説明。非常に前向きな反応を得て、その場で MOU (覚書) を締結し、多角的に連携を進めることで合意した。



## 12月8日(月)

### 09:00 - 11:00 ヨルダン子どもミュージアム

- 成果: 徳島県立あすたむらんどとの連携として、ヨルダンの冬休み期間 (1 月) にオンライン・ワークショップを複数回実施することで合意。時差 (日本時間 15

時＝現地 9 時) を利用した実施枠を調整。



- 12:00 - 13:00 CPF (皇太子財団)
  - 成果: マネージャーらと協議し、MOU 締結に合意。傘下のインキュベーション施設「The Playground」を視察し、起業家支援も可能なプロレベルの機材環境を確認した。
- 13:00 - 15:00 HTU (アル・フセイン工科大学)
  - 対応者: 副学長、学部長ら主要メンバー。
  - 成果: 以下の 3 種類の MOU 締結で合意に至った。
    1. JICA プロジェクト関係者全体
    2. HTU × 四国大学
    3. HTU × 株式会社 steAm
  - 内容: 学び合いの教授法、e スポーツ、藍染 (データ分析・高級スカーフ開発) など具体的連携分野を確定。



- 15:30 在ヨルダン日本大使館 表敬訪問
  - 報告: 浅利大使へ、申請中の JICA プロジェクト概要と、今回の訪問による各機関との連携成果 (MOU 合意等) を報告。
  - 評価: 大使より\*\*「非常に面白く有意義なプロジェクトである」\*\*との高い評価

と、実現に向けた応援メッセージをいただいた。

● 17:00 MoTA（観光・遺跡省）

- 協議: 万博ヨルダン館の活躍を報告し、政府の歓待へ謝意を伝えた。
- 連携: 観光教育分野でのデータ連携や、2027年横浜博を見据えた課題（中東の安全性認識の変容、ツアー造成等）について意見交換した。



● 19:00 PTI（観光開発関連）協議

- 対応者: Dr. Aghadeer Jweihan, Ms. Ghazal Etoum

合意:

1. JICA 草の根事業への全面協力。アガディール博士と娘さんが主担当（Main PIC）となる。
2. 不足予算は自ら獲得に動くという主体性の確認。
3. 藍の種の育成テストを2ヶ所で開始する。

### （3）成果・教育的効果

本事業を通じて、上板町の子どもたちは、地域文化が国際舞台で評価・活用される経験を得るとともに、異文化理解や国際的視野を大きく広げることができた。

また、自治体・県・国が連携した国際交流の実践例として、徳島県内外における波及効果も期待される。

（1）教育的効果：次世代の「グローバル」視点の醸成

- 自地域の文化的価値の再発見 上板町立高志小学校におけるヨルダンとの交流授業において、児童たちは自分たちにとって身近な「阿波藍」が、遠く離れた中東の地で高く評価され、求められていることを肌で感じる事ができた。これにより、地域文化への誇り（シビックプライド）が大きく醸成された。教室を見てみると、子どもたちが世界5か国を紹介すると、その中には必ずヨルダンが入っているくらい

ヨルダンへの関心は深くなっている。また、ヨルダン国歌も歌詞を見ずに歌えるほどになっており、かなり密度の濃い交流が実現できたと考えている。

- 多様性への理解とコミュニケーション意欲の向上 ヨルダンの大学生や関係者との対話を通じ、言語や宗教、生活習慣の違いを「学び」としてポジティブに受け入れる姿勢が育まれた。英語を「教科」としてではなく、想いを伝える「ツール」として捉え直す機会となり、児童の学習意欲や異文化コミュニケーションへの関心向上に寄与した。

## (2) 事業的成果：持続可能な国際協力モデルの確立

- 「点」から「面」へのパートナーシップ拡大 単発の交流イベントに留まらず、ヨルダン大学（学術）、アル・フセイン工科大学（技術・教育）、皇太子財団（イノベーション・若者支援）といった同国の主要機関と MOU（連携覚書）を締結または合意形成に至った。一自治体の事業が、相手国のトップアカデミアや王室関連機関を巻き込んだ強固なコンソーシアムへと発展したことは、極めて高い成果である。
- 万博機運の醸成と地域還元 あすたむらんど徳島での「ヨルダン展」先行開催により、万博の機運を県内全域へ波及させることができた。また、ヨルダン館からの展示物譲渡確約を取り付け、「技の館」での常設展示への道筋をつけたことは、万博のレガシーを地域観光や産業振興に直接的に還元する具体的な成果といえる。
- 次期展開（JICA 事業）への接続 本事業での信頼関係と実績が評価され、次年度以降の「JICA 草の根技術協力事業」への申請要件を満たす強固な実施体制が整った。これにより、一過性のイベントで終わらせず、中長期的な視点で地域の活性化と人材育成を回していく「持続可能な国際協力サイクル」の基盤が完成した。

## (4) 今後の展望（万博レガシーから JICA 事業への発展）

今後は、本事業で構築された人的・文化的ネットワークを活かし、藍染めを軸とした継続的な文化交流、学校教育との連携、地域施設を拠点とした国際理解教育の深化を図ることで、万博レガシーの定着と発展につなげていく。

### 1) JICA 草の根技術協力事業への展開（2026 年～2029 年）

本事業で培われた上板町とヨルダンの信頼関係を基盤に、2026 年度より JICA 草の根技術協力事業（地域活性型）「阿波藍と STEAM で未来を染める双方向共創事業」の実施に向けた申請手続きを進めている。

- 目的：ヨルダンの地方女性への「阿波藍」技術移転による経済的自立支援と、若者を対象とした「STEAM 教育×藍」による人材育成を両輪で推進する。
- 実施体制：提案自治体を上板町、指定団体を四国大学とし、ヨルダン側は教育省、プリンセス・タグリッド財団（PTI）、アル・フセイン工科大学（HTU）、皇太子財団（CPF）と連携する「産官学民」の強力なコンソーシアムを形成する。

### 2) 多層的なパートナーシップの確立（MOU の締結）

2025 年 12 月のヨルダン訪問において、以下の主要機関と MOU（連携覚書）の締結および合意に至り、次期事業に向けた実施体制を盤石なものとした。

- 学術・教育連携： ヨルダン大学（国内最高学府）およびアル・フセイン工科大学（HTU）と、四国大学および株式会社 steAm 間での MOU 締結に合意。共同研究やデータ連携、教育プログラム開発を推進する。
- イノベーション連携： 皇太子財団（CPF）と MOU を締結し、同財団のインキュベーション施設を活用した起業家支援や「The Makerspace」での共同制作を行う。
- 王室・政府レベルの承認： 一連の成果はヨルダン王室（アブドゥッラー2世国王陛下）への報告が進められており、国家レベルでの協力体制が整いつつある。

### 3) 万博レガシーの継承と「ヨルダン展」の開催

大阪・関西万博の機運醸成とレガシー継承に向け、段階的な展示企画を展開している。

- 先行実施（あすたむらんど徳島）： 万博開催に先駆け、本年12月から3月までの期間、あすたむらんど徳島にて「ヨルダン展」を既に開催中であり、多くの来場者にヨルダンの魅力を発信している。
- 本格展開（技の館）： 来年度（万博終了後）を見据え、上板町の拠点施設「技の館」内に常設展示スペースを既に確保した。万博ヨルダン館から譲渡される展示物（羊毛タペストリー、死海の塩、映像データ等）を活用し、2027年の横浜国際園芸博覧会へとつながる持続的な観光・文化交流拠点を形成する。

### 4) 教育を通じた「グローバル人材」の育成

上板町立高志小学校で先行実施されたヨルダンとのオンライン交流・STEAM 学習モデルを、町内の他小中学校へも水平展開する。ヨルダンの大学生をロールモデルとして交流することで、子どもたちが「地元の文化（阿波藍）」の世界的価値を再認識し、広い視野を持つ「グローバル人材」として成長する教育環境を整備する。

これらの成果を踏まえ、上板町はヨルダン側関係機関との継続的な協議を経て、JICA 草の根技術協力事業（地域活性型）への応募を行った。

本応募は、万博を契機とした国際交流を、教育・文化・地域産業振興を包含する中長期的な国際協力事業へと昇華させる試みであり、地方から世界へ発信する実践的な国際協力の新たな段階を示すものである。

今後は、JICA 事業の枠組みを通じて、

- ① 阿波藍文化とヨルダン伝統文化の共同発信
  - ② 子ども・若者を中心とした国際理解教育の体系化
  - ③ 万博レガシーを活用した地域ブランド形成
- を段階的に推進する計画である。

これにより、本事業の成果は上板町にとどまらず、徳島県内外の自治体、さらには全国の万博関連国際交流事業へと波及し、日本の地方自治体が担う国際協力の新たな可能性を提示するものと期待される。

## (5) 子どもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

阿波藍が国際舞台で評価・活用される体験を通じ、児童は地域文化への誇りと世界とのつながりを実感した。

ヨルダン国歌を歌い、大学生や関係者と対話する中で、異文化を尊重し主体的に関わろうとする姿勢が育まれた。

地域にいながら世界と協働できるという実感は、将来の進路や学びへの意欲向上につながった。

## (6) 特に良かった点・苦勞した点

良かった点

藍染を軸に「実際に使われる文化交流」が実現し、子ども・自治体・大学・王室関連機関まで広がる重層的連携が構築できた。

万博会期前・会期中・会期後を通じた一貫した交流設計により、継続性のある関係を築けた。

苦勞した点

国際調整や政府・大学との協議など調整事項が多く、体制整備に相当な労力を要した。

単発交流で終わらせず、事業化（JICA）へ接続する構想整理に時間を要した。

## (7) 今後の展開

万博交流を基盤に、JICA 草の根技術協力事業として阿波藍×STEAM の双方向共創事業を展開する。

ヨルダン大学・HTU・皇太子財団等との MOU を活用し、教育・産業・女性支援を包含する協力体制を深化させる。

「技の館」常設展示やヨルダン展を通じ、レガシーを地域教育・観光振興へ定着させる。

昨年度、今年度と事業を実施する中で、やはり一番効果があるのは対面の交流によるものであった。時差の関係から児童間のオンライン交流については難しいため、映像を使用したりするなど、より効果がある形での事業策定を行いたい。

## (8) 今後の展開における課題

万博後も人的ネットワークを維持し、制度的・財政的に持続可能な体制を確立する必要がある。

教育・文化・産業を横断する事業を地域全体へ波及させるための人材育成と運営体制の強化が課題である。

国際協力を地域活性化へ確実に接続するため、成果の可視化と継続的発信が求められる。

【別紙】 関連メディア掲載一覧

■ ヨルダン・ナショナルデー（徳島 NHK）

概要：徳島の子どもたちが万博ヨルダン・ナショナルデーに参加し、国際交流を行った様子を報道。

URL：<https://www3.nhk.or.jp/lnews/tokushima/20250507/8020022989.html>

■ フセイン皇太子が石破総理を表敬訪問（首相官邸 HP）

概要：ヨルダン皇太子による日本政府表敬訪問の公式記録。万博を通じた日・ヨルダン関係強化の象徴的事例。

URL：<https://www.kantei.go.jp/jp/103/actions/202505/08hyoukei.html>

■ 万博を通じた交流知って（徳島新聞）

概要：ヨルダンパビリオンから徳島県への展示品譲渡と、あすたむらんど徳島での展示を紹介。

URL：※徳島新聞デジタル掲載

■ EXPO LEGACY TOKUSHIMA 感謝展（PR TIMES）

概要：『未来を紡ぐ～ヨルダン ワディ・ラムからの手紙～』展の開催概要と意義を紹介。

URL：<https://prtimes.jp/>

■ 万博を通じた交流知って（47NEWS）

概要：ヨルダンパビリオン展示品譲渡と徳島でのレガシー展示を全国配信。

URL：<https://www.47news.jp/>

【主要面会者リスト】

1. AQAC (Accreditation and Quality Assurance Commission)

- Prof. Yousef A. Al Abdallat (President's Assistant) 他

2. The University of Jordan (ヨルダン大学)

- Prof. Dr. Faleh Sawair (Vice President)
- Prof. Ashraf Eid Abukaraky (Vice President for Science School)
- Prof. Dr. Hadeel Ali Ghazzawi (Dean of Agriculture) 他

3. Jubilee Institute (ジュビリー・インスティテュート)

- Ms. Dima Goussous (Head of Sponsorship Programs) 他

4. Crown Prince Foundation (CPF / 皇太子財団)

- Ms. Mais AlDaud (Deputy CEO)
- Ms. Nujoud Serhan (Deputy CEO)
- Mr. Ismail Hakki (Innovation MD) 他

5. Al Hussein Technical University (HTU / アル・フセイン工科大学)

- Prof. Lutfi Al-Sharif (Vice President)
- Dr. Firas Jarrar (Dean, Engineering Technology)
- Dr. Hussam J. Khasawneh (Assistant to President for Industry Partnership) 他

6. Children's Museum Jordan (ヨルダン子どもミュージアム)

- Ms. Diana Karus (QA Manager) 他

7. Ministry of Tourism and Antiquities (MoTA / 観光・遺跡省)

● Mr. Yazan Al-Khadiri (Secretary General)

8. PTI (Petra Tourism Development)

● Dr. Aghadeer Jweihan, Ms. Ghazal Etoum

9. 大阪・関西万博 ヨルダン館関係

● Ms. Shifa (Acting Commissioner General), Mr. Jobran

10. 在ヨルダン日本国大使館

● 浅利 秀樹 特命全権大使、山田 ミカ 氏

11. JICA ヨルダン事務所

● 神谷 望 氏、川崎 歩 氏

12. 日本側自治体関係者 (三戸町)

● 高田 健二 氏、越後 千寿 氏

## 3-24 香川県 × ブラジル

### (1) 背景と目的

#### ①背景

現在、ブラジルではサンパウロ市のブラジル香川県人会、ベレン市の北伯香川県人会の2つの県人会が活動を行っており、大正2年（1913年）に初めて県人がブラジルに移住してから令和5年で110周年を迎えた。これまでも、県人会の記念式典等へ訪問団を派遣し、交流を行ってきたほか、研修員が必要とする技術の本県で習得し、県民との交流を通じて相互の理解を深める海外技術研修員受入事業や県人会員から選出された研修員を受け入れ、日本語研修や県民との交流を行う南米交流次世代人材育成事業を実施し、友好増進に寄与してきた。

一方で、ブラジルにおける世代交代の進行により、日系人であっても3世以降の方は日常生活で日本語を使う機会が少なく、日本や出身県への関心が低下すること等の影響で、県人会への新規加入や若手会員による活動が停滞している。また、本県においても、若い世代では、親戚が渡伯した等の経験がなく、ブラジルを身近に感じるようになっていない。

2025年に開催される万博を契機として、県人会を窓口としたブラジルとの交流や協力関係の強化と県民の興味・関心を高めるため、万博国際交流プログラムを申請し、令和6年度内閣官房事業を実施したところである。

上述した海外技術研修員や県人会員から選出された研修員の受入れは、一定程度の日本語能力を持つ者を対象に、半年間の研修を行うものであるが、近年、日本語をまったく話せない子弟が増えてきたことで、応募者が減少している。また、県人会員の子弟の中には、本県への感心が薄れ、県人会に参加していない者もでてきているという現状がある。

#### ②目的

本事業は、上記の課題を踏まえ、本県を訪問した経験のない県人会の会員やその子弟等を短期間招へいし、先祖の出身地域への訪問、親族や県民との交流など、自らのルーツを探る活動を実施することにより、故郷への愛着を高め、帰国後は県人会活動に積極的に関わっていただける人材を確保することで、今後の本県と県人会との交流の活性化に資するものである。また、本県とブラジル香川県人会との継続的な交流に向けた関係の強化を図るとともに、県民の皆様にもブラジルについて関心を持っていただき、ブラジルが万博で発信する文化や歴史等の情報に県民が触れる機会を設け、万博を盛り上げる機運を醸成する。

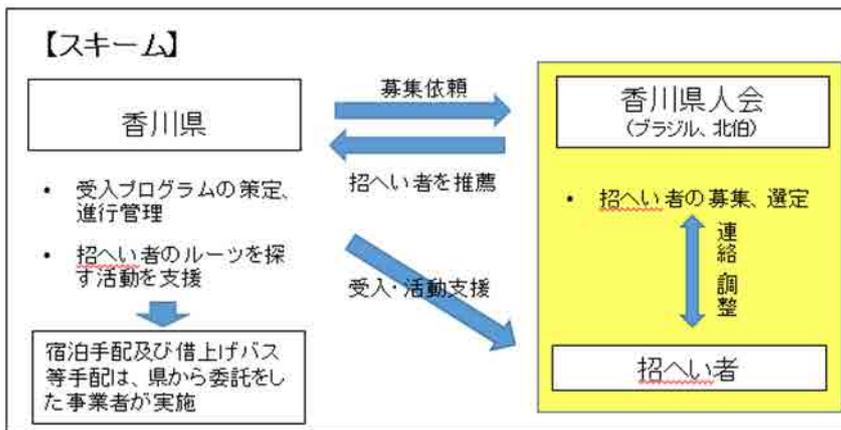
## (2) 事業内容

### ①南米交流次世代人材育成事業短期研修

ブラジル香川県人会、北伯香川県人会の両県人会から、推薦された者を本県に招へいし、日本語能力を問わず、10日間程度の本県での短期研修を実施し、県民との交流や本県の文化に触れることで「母県」に対する関心を高め、県人会活動への参加や日本語学習へのモチベーションを向上させ、もって、県人会への加入、既存研修事業への参加、さらに、将来的な県人会青年部におけるリーダー育成に繋げようとするもの。

ブラジル及び北伯香川県人会から推薦された来県経験のない県人子弟8名を招へいし、県内の視察や文化体験、県民との交流等を行うことで、今後の県人会活動や香川との交流事業を担う若い世代の人材を育成した。

#### ・実施体制



5月 県人会へ事業制度説明、募集依頼

6月上旬 県人会での招へい者選考、推薦

6月中旬 招へい者決定

・実施期間：7月22日(火)～7月29日(火)（移動日除く）

#### i) 大阪・関西万博参加

ブラジル香川県人会及び北伯香川県人会からの青年に加え、県事業としてブラジルを訪問したことのある大学生等、計24名とともにブラジルをはじめとするパビリオンへ訪問したものの。

若手県人子弟からは、万博全体の感想として「日本に対する愛着や他の地域に対する関心が非常に高まった。」という意見が挙がった。



【参加者・パビリオン関係者集合写真】



【ブラジル館・館長による展示説明】

ii) ルーツ探し

先祖の親族へ訪問し、自らのルーツを探す活動を実施することにより、故郷への愛着を高めようとするもの。家系図をたどったり、仏壇を祀ることなどを通して親族との交流を深めた（計6件）。

実際に親族を訪問した者からは「自分が日本人だという認識が生まれた。今後は香川県人会と香川県との繋がりを強化できるような活動をしたい」との声があった。



【親族との交流の様子】

### iii) 県民交流イベント「香川・ブラジル料理交流会」

県民（30名）とブラジルの青少年とで互いの文化交流を図るもの。はじめにブラジルの地理や文化、県人会の歴史についての講座を行い、その後、双方の郷土料理を教え合い、調理することを通して互いの文化等への理解を促進した。



【料理教室】



【ブラジルについての講座】

### iv) 県内観光ほか視察

来県経験のない招へい者に、先祖の出身県である香川の魅力を知ってもらうとともに香川県に対する愛着を持ってもらうため、県内の観光名所を視察したほか、特産品である讃岐うどん作り体験等を実施した。参加者からは、「歴史ある観光地（金刀比羅宮など）をめぐり、古いものを尊重するという日本文化に触れることができよかった。ブラジル社会の中の日系社会にもある考え方で、共通するものを感じた。」という意見が上がった。また、「帰国後に両親や祖父母に懐かしい母県の様子を伝えたい」という声も多かった。

### v) 意見交換会

最終のまとめとして、参加者に感想や当事業の効果等を確認した。

#### 【意見】

・ルーツ探しを通じて：

3世・4世となってくると、自分が日本人だという感覚はなくなってくるが、この気持ちが強くなるきっかけとなった。

日本にすることがあったとしても、面識のない親戚の家に突然訪れるのは、言葉の壁もあり、難しいが、今回のように県が間に入ることによって、スムーズに親戚とのつながりを再構築できた。次の世代の親戚とつながれたのは大きいと感じる。

自分の祖父母のヒストリーをじかに聞けてうれしい。これまでは、祖父母の話がよくわからない部分あったが、今ではわかったような気がする。自分自身を知ることができるスタートに立てた。

- ・事業全体を通して

香川県に対する海外技術研修員として、香川県にもう一度来たい。

県人会と香川をつなぐパイプ役になりたい。

## ②在県ブラジル人と子どもたちの交流

在県ブラジル人が学童を訪問し、ブラジルの紹介を行うなど、子どもたちと交流した。

- ・日時 2025年12月18日



【児童との交流の様子】

## (3) 事業の目標に対する成果

交流計画書記載事項に基づき、具体的な成果、分析結果について

- ・ 県人会青年部への加入者の増（5人以上）【結果：3名】
- ・ 参加者との交流イベントへの県民の参加（30名以上）【結果：47名】
- ・ 参加者（日伯双方）による万博及びブラジルパビリオンに関する情報発信（合計15件以上）

【結果：50件程度】

本事業に参加したブラジルおよび北伯県人会からの青少年の多くは、祖父母世代から移住前の日本の話をよく聞いており、それ故に日本の伝統を思いのほか理解している一方で、「今の日本」の姿はネットを通じてしか知りえていない状況であった。今回、自分と同世代の日本人の青少年との交流や、大阪万博に参加することを通じて、若者目線で見た日本・香川県の現状に触れることとなり、日本や香川に対する関心を高めることができた。また、親族訪問・ルーツ探しを通して、香川県に対する愛着が湧き、人的なつながりを形成したことにより、今後の県人会活動への参加や日本語学習へのモチベーションを向上させ、今後の県人会を担う人材育成につながったと考える。県人会への新規会員の加入数そのものの数値目標は達成できなかったが、積極的に県人会活動に関わる人員は増加したものと考えられる。

また、ブラジル人との交流イベントへの県民の参加により、当該人材育成事業の効果を県人会のみにとどめることなく、多くの県民に還元することにつながった。情報発信については、参加者の自発的な発信に委ねたところであるが、参加者自身が多くの人に日本や香川県について知ってほしいとの思いから SNS に多くの投稿をし、目標を達成することができた。

#### **(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与**

今回の取組を契機として、日伯双方の若者同士のつながりを作ることができた。参加者と連絡先を交換し、今でも互いに SNS で連絡を取り合っているとのことであった。このような人的つながりが本取組のレガシーとして今後に残り、これからの本県とブラジル香川県人会との関係強化に大きく寄与するものと考ええる。

アンケートにおいても、すべての参加者が日本や香川県への関心が「とても高まった」または「高まった」と回答しており、今後の交流を作っていくうえで期待できる効果を感じられるとともに、ここからさらに進んで、当県事業の南米次世代人材育成事業（半年）に参加したいという意見や、何かしらの形、インターンなどで香川県を再訪したいという意見があり、このような人材を育成できたことは今後の関係強化につながるものと考ええる。

#### **(5) 参加者にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮**

ルーツ探しや親族訪問を通じ、自身が日本人のルーツを持つことを実感し、香川県への愛着が高まった。

万博参加や同世代との交流により、日本や世界への視野が広がり、将来再訪したい、県人会を担いたいという意欲が醸成された。

日本語学習へのモチベーション向上や、海外技術研修員事業への参加意欲の喚起につながった。

#### **(6) 特に良かった点・苦勞した点**

良かった点

ルーツ探しや県民交流により、人的なつながりを再構築し、若手世代の県人会活動参加意欲を高めることができた。

SNS を通じた積極的な情報発信により、万博および香川県の魅力を広く発信できた。

苦勞した点

県人会青年部への新規加入数は目標値に届かず、数値目標の達成には課題が残った。世代交代が進む中で、言語や意識の変化に対応した継続的な関与の仕組みづくりが必要である。

### **(7) 今後の展開予定**

本事業のねらいである「万博を契機とした継続的な国際交流と地域の活性化」のため、今後とも本県からブラジルへの訪問、ブラジルから本県への招へいを重ねていくことで、本県とブラジル香川県人会との継続的な交流に向けた関係をより強固なものにしていくとともに、派遣事業参加者と協力した事業の展開を図り、県民の皆様のブラジルや県人会に対する関心を高めていきたい。

また、本事業をきっかけに県人子弟が日本語学習へのモチベーションを高め、日本語能力を向上させることができたが、これを従来から本県で実施している海外技術研修員受入事業や南米交流次世代人材育成事業への参加に着実に繋げられるよう、継続したフォローを行っていくこととしたい。

### **(8) 今後の展開における課題**

短期招へいで高まった関心や意欲を、県人会加入や既存研修事業参加へ確実につなげるフォロー体制の強化が求められる。

世代交代が進む中で、日本語能力に依存しない交流機会の創出と、若手層の継続的参画の仕組み構築が課題である。

万博を契機とした交流を一過性に終わらせず、県民全体への波及と持続的な関係強化へ発展させる必要がある。

## 3-25 香川県 × パラオ

### (1) 背景と目標等

#### 1) 背景と目的

令和5年2月に駐日パラオ共和国特命全権大使のピーター・アデルバイ閣下に香川県を訪問いただいた際に、相互交流ができる関係を築いていきたいとのコメントを頂戴した。パラオと香川県は、多島国・多島県であり、また、パラオが本県の真南に位置すること、パラオが日本の委任統治領だったことから、日本の食文化が残り、香川と同じく正月に年明けうどんを食す習慣があること等、多くの共通点がある。万博を契機に、具体的な相互交流を開始し、今後の持続的な交流に向けた取組ができると考え、令和6年度から本事業に参画した。

令和6年12月には、本県で開催されたうどんイベントに大臣をはじめとするパラオ訪問団を迎え、パラオと万博をテーマにした子ども向けイベントや来場者へのパラオうどんの提供を行った。令和7年1月には、本県職員がパラオへ訪問し、大統領をはじめとする大臣級の方々との面会を通して、次年度以降の交流について調整を行うとともに、現地学校や国営放送局にて万博及び本県のPRを行った。

令和7年度は、令和6年度の交流を土台とし、パラオの万博ナショナルデーに本県から参画・協力を行うとともに、パラオ政府関係者及び現地パフォーマーを本県に招待し、本県の中学生との交流イベントを行う。万博会期後にはパラオへうどん職人を派遣し、現地で讃岐うどんをふるまうとともに高校生に手打ちうどん体験をしてもらうなど、本県の食文化をPRするとともに、さらなる相互交流へ繋げることを目的とする。

#### 2) 目標

- ・香川県とパラオ共和国の交流及び万博についてのPR
- ・パラオ共和国での香川県及び本県食文化のPR
- ・香川県とパラオ共和国の継続的交流のきっかけ作り

### (2) 事業内容

#### 1) パラオ共和国万博ナショナルデー及び万博レセプション出席

香川県からパラオ共和国万博ナショナルデーへ参加するとともに、パラオ共和国による万博レセプションに出席し、パラオ共和国ウィップス大統領をはじめとするパラオ政府関係者との面会を通じて、香川県とパラオ共和国とのさらなる交流に向けた機運醸成を図った。

### ① スケジュール

|           |                            |
|-----------|----------------------------|
| 令和7年1月～   | 万博ナショナルデーへの参加提案、調整         |
| 令和7年3月～   | 万博レセプションへの参加、大統領との面会調整     |
| 令和7年4月28日 | パラオ共和国万博ナショナルデー式典への参加      |
| 令和7年4月29日 | 大統領との面会、パラオ共和国万博レセプションへの参加 |

### ② 体制

- ・香川県
- ・駐日パラオ共和国大使館、在仙台パラオ共和国名誉総領事館（パラオ本国との調整）

### ③ 内容

- ・パラオ共和国万博ナショナルデー式典への参加

パラオ共和国万博ナショナルデーの式典に参加し、香川県とパラオ共和国のデザインを施した丸亀うちわの配布を行った。うちわには二次元コードを記載し、香川県の紹介ページへ誘導することで、香川県のPRを図った。一般来場者からは、パラオ共和国と香川県との繋がりに興味を持つ様子が見られ、中には二次元コードから香川県の紹介ページを閲覧する者も見られた。



丸亀うちわの配布



会場の様子



ウィップス大統領の挨拶

- ・香川県知事とパラオ共和国大統領との面会

パラオ共和国万博レセプションの前に、ウィップス大統領と香川県知事の面会を行った。面会はカジュアルな談話形式であり、形式的な挨拶はなく、談話後は記念品の贈呈と記念撮影を行った。

談話の中では、知事から香川県の地理（大阪からの距離、面積等）、産業（ハマチの養殖、オリーブ等）、及び2025瀬戸内国際芸術祭についての紹介があった。ウィップス大統領からは、パラオでも瀬戸内国際芸術祭と同様のアートフェスティバルを企画し、観光客をさらに誘致したい旨や香川県の養殖技術をパラオにも輸入したい旨が述べられた。特

に水産業には関心がある様子であり、養殖技術や教育人材の誘致だけでなく、マグロやハマチの日本との貿易についても興味をお持ちであった。



面会の様子



集合写真

#### ・パラオ共和国万博レセプションへの参加

パラオ共和国からの招待により、知事及び本県国際課職員3名がレセプションへ参加した。パラオ共和国のシンガーによるチャントでレセプションが始まり、両国の国歌を合唱した後、ウィップス大統領、外務副大臣、香川県知事、神戸市議会議員、在三島パラオ共和国名誉総領事からの挨拶があった。会の途中では、万博ナショナルデーに参加したパラオ共和国ソンソロール州のパフォーマーによる伝統舞踊が披露された。



香川県知事の挨拶



伝統舞踊の披露



大統領と知事の談話

#### ④ 効果

##### ・香川県とパラオ共和国の交流についてのPR

(パラオ共和国万博ナショナルデーにて、パラオ共和国関係者及び来場者に、香川県とパラオ共和国のデザインを施した丸亀うちわを1,000本配布。)

##### ・香川県とパラオ共和国の継続的交流のきっかけ作り

(香川県知事とパラオ共和国大統領との面会、パラオ共和国万博レセプションでのパラオ政府関係者との接点など)

## 2) パラオ共和国訪問団と直島中学校の交流会開催

パラオ共和国からダンサーとシンガーを総勢 15 名（万博ナショナルデーに参加したパラオ共和国ソンソロール州の伝統舞踊のパフォーマー）を招へいし、直島町にて地元中学生との交流会を開催した。

### ① スケジュール

令和 7 年 2 月～ パラオ共和国訪問団の来県調整

令和 7 年 3 月～ 直島町との交流会企画調整

令和 7 年 5 月 1 日 交流会開催

### ② 体制

・香川県

・駐日パラオ共和国大使館、在仙台パラオ共和国名誉総領事館（パラオ本国との調整）

### ③ 内容

交流会では、パラオ共和国ソンソロール州のダンサーとシンガーによる伝統舞踊のパフォーマンスが披露されたほか、パラオの高校生と直島中学生との間で記念品の交換や記念撮影等を通じた交流が行われた。

当日は、直島町の学校関係者のみならず、地域住民や一般来場者も多数参加し、会場は大いに賑わった。また、本交流会の様子は地元ニュース等でも報道され、香川県及びパラオ共和国の交流の意義や、2025 年大阪・関西万博の PR にも大きく貢献した。

さらに、交流会終了後には、参加した直島中学生を対象にアンケート調査（別添参照）を実施し、交流会を通じてパラオ及び万博への興味・関心がどのように高まったかについて検証を行った。調査結果からは、多くの生徒がパラオの文化や万博に対して新たな関心を抱いたことが確認でき、国際交流事業の有効性を示す成果が得られた。

### ④ 効果

・香川県とパラオ共和国の交流及び万博についての PR

○別添直島中学生へのアンケート参照（N=31）

・交流会を通じて、パラオへの興味・関心が高まった人の割合 100%

・交流会を通じて、万博への興味・関心が高まった人の割合 83.9%



パフォーマンス披露



直島中学生代表による感謝の言葉



記念品交換



集合写真

### 3) パラオ共和国へのうどん職人派遣

令和7年12月17日～21日の日程で本県のうどん職人とともにパラオ共和国へ訪問し、現地の学生や地域住民とうどん作り体験を通じた交流会を実施した。

#### ① スケジュール

令和7年9月～：パラオ名誉総領事や大使館を通して、パラオの訪問日程や訪問先等について調整

本場さぬきうどん協同組合を通して、うどん職人の派遣について調整

令和7年11月～：うどん交流会の企画調整

令和7年12月19日：ガラマヨン文化センターにてうどん交流会の実施

令和7年12月20日：ミゼンティ高校にてうどん交流会の実施

#### ②体制

- ・香川県
- ・駐日パラオ共和国大使館、在仙台パラオ共和国名誉総領事館（パラオ本国との調整）
- ・本場さぬきうどん協同組合（うどん職人の派遣調整）

#### ③内容

#### ・ガラマヨン文化センターでのうどん交流会の実施

ビルン・グロリア・サリー伝統的女性大酋長の招待により集まったパラオ共和国の伝統的女性酋長一行、郵政長官のサンティ・アサヌマ氏、及び関係機関の方々へ、うどん職人によるさぬきうどんの提供及びうどん作りのデモンストレーションを行った。

当日は、職人が厳選した素材を使用し、麺棒でうどん玉を丁寧に伸ばし、麺切包丁で均一に切る工程を実演した。参加者からは、普段食べているうどんとは異なる独特の弾力や食感、そして香り高い味わいに対し、「非常に美味しい」「食感が新鮮で感動した」など、好意的な感想が多数寄せられた。また、職人による熟練の技に歓声や拍手が起こり、うどん作りの工程に対する関心の高さがうかがえた。

さらに、交流会に見学として参加された在パラオ日本国大使館の担当者からは、「食文化を通じた交流イベントは非常に貴重であり、今後も継続的に実施してほしい」との要望をいただいた。



うどん作りのデモンストレーション



集合写真

#### ・ミゼンティ高校でのうどん交流会の実施

パラオ共和国郵政長官サンティ・アサヌマ氏が先生を務めるミゼンティ高校にて、うどん交流会を行った。参加した高校生20名は、うどん職人による実演に続いて、小麦粉をこねるところからうどんを包丁で切り、ゆがくところまで、実際にうどん作りを体験した。参加した生徒たちは、初めて触れるうどん作りに興味津々で取り組み、粉から生地を作る工程や麺棒で生地を伸ばす作業、包丁で均等に切る難しさを体感しながら、楽しそうに活動していた。うどん職人やスタッフの補助のもと、生徒同士で協力しながら、和気あいあいとした雰囲気の中で作業が進められた。

出来上がったうどんは、さぬきうどんのだしとともにその場で試食し、「弾力があってとても美味しい」「日本の食文化を直接体験できてうれしい」といった感想が多く寄せられた。中には「自分でもまた作ってみたい」という声も聞かれ、うどん作りを通じて日本文化への興味や理解が深まった様子がうかがえた。

郵政長官のアサヌマ氏からは、「若い世代が日本の伝統文化に触れる貴重な機会となった。今後もこのような交流を続けてほしい」とのコメントがあった。

#### ④効果

- ・パラオ共和国での香川県及び本県食文化の PR
- ・香川県とパラオ共和国の継続的交流のきっかけ作り



うどん作り①



うどん作り②



うどん作り③



うどん作り④



集合写真①



集合写真②

### (3) 事業の目標に対する成果

香川県とパラオ共和国の交流及び万博の PR については、パラオ共和国万博ナショナルデーでの丸亀うちわの配布や直島中学校での交流会によって十分に行うことができたと考えられる。特に直島中学校での交流会では、両国の若い世代が直接交流する機会を設けることで、香川県とパラオ共和国の友好関係の強化を図るとともに、万博への関心を高めることができた。交流会の様子は地元ニュース等でも報道され、広く地域住民に PR することができた。参加した生徒へのアンケート調査では、多くの生徒がパラオ共和国や万博に対して新たな興味・関心を抱いたことが確認され、国際交流の意義や万博への期待感の醸成につながったと考える。

パラオ共和国での香川県及び本県食文化のPRについては、パラオでのうどん交流会開催によって十分に達成できたと考える。ガラマヨン文化センターでの交流会では、パラオ共和国の伝統的女性酋長一行や関係機関の方々を対象に、職人による「さぬきうどん」の提供及びうどん作りのデモンストレーションを実施し、参加者からは、さぬきうどんの独特な食感や味わいに対して高い評価が寄せられた。また、職人による実演には多くの歓声が上がリ、香川県の食文化への関心が高まるとともに、パラオ共和国において香川県の魅力を発信する機会となった。さらに、在パラオ日本国大使館からも食文化を通じた交流イベントの継続的な実施を要望されるなど、今後のPR活動の発展につながる成果が得られた。同様に、ミゼンティ高校での交流会においても、うどん作り体験を通して、現地の高校生に本県の食文化を肌で体験してもらうことができた。郵政長官のアサヌマ氏からは、「若い世代が日本の伝統文化に触れる貴重な機会となった。今後もこのような交流を続けてほしい」とのコメントもあり、今後の交流の可能性を示す大きな成果を得ることができた。

香川県とパラオ共和国の継続的交流のきっかけ作りについては、本交流事業全体を通じて、両国の関係者や若い世代が直接交流する機会を持つことができ、現地関係者や日本国大使館からも今後の交流事業の継続に対する期待が示されているなど、一定の成果を得ることができたと考える。

#### **(4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与**

本事業により、パラオ共和国と香川県の継続的な交流に向けた土台作りはできたと考える。昨年度から引き続き今年度も、大統領をはじめとするパラオ共和国の政府関係者と多くの繋がりを持つことができた。加えて、パラオ共和国でのうどん交流会の実施後には、現地関係者や日本国大使館からも今後の交流事業の継続に対する期待が示されており、今後もうどんを通じた交流や青少年交流等の形で交流が続いていくと考えられる。

#### **(5) こども（または参加者）にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮**

パラオ共和国訪問団と直島中学校の交流会に参加した生徒のアンケートでは、参加者全員が交流会を通じて、パラオ共和国に興味関心が高まったと回答している。中には「実際に行って、観光をしたり、パラオの友達と話をしたりしてみたいです」という感想もあり、国際交流をきっかけに自分の世界を広げたいという前向きな意欲が見られた。

また、ミゼンティ高校でのうどん交流会に参加したパラオの高校生からも、「日本の食文化を直接体験できてうれしい」「自分でもまた作ってみたい」といった声が寄せられ、異文化体験を通じて新しいことに挑戦する楽しさを実感した様子が見られた。

## **(6) 特に良かった点、苦勞した点**

### 1) 良かった点

パラオ政府関係者及び大使館関係者との繋がりをもとに、両国の若い世代同士の交流を実施できた点。

### 2) 苦勞した点

パラオ共和国万博ナショナルデーや万博レセプションへの参加について、当日のスケジュールがなかなか決まらず、パラオ政府関係者及び大使館関係者との調整が難航した点。

## **(7) 今後の展開**

まずは、本事業を通してできた香川県とパラオ共和国の繋がりを持続していきたい。そのために、本事業終了後も、本県職員のパラオ渡航費について一定の予算を確保したい。また、長期的には、県内の乾麺製造メーカーに働きかけを行い、現地で香川県のうどんを持続的に提供できる手段がないか検討していきたい。

さらに、こどもとの交流という観点からは、県内保育園とパラオの学校との交流を調整している。12月にパラオを訪問した際、うどん交流会を通してJICAパラオ事務所と繋がりができた。以前、県内の保育園から「5～6歳の園児対象で海外の学校と交流できないか」という相談を受けており、同事務所に相談したところ、快諾いただけた。そこで、まずはオンラインでの交流を調整しているところである。

## **(8) 今後の展開における課題**

県内の乾麺製造メーカーに働きかけを行う際、メーカー側にどのようなメリットを示せるかが課題となる。現地のスーパーで販売されている乾麺の価格は、日本と比べてかなり安価であり、またパラオの市場規模は小さいため（パラオの人口は2024年時点で17,695人）、メーカーとしては商品をパラオに卸すことによるメリットは少ないと考えられる。パラオ大使館を通じて公式行事等のイベント時に商品を使用してもらう等、様々な方法を模索していく必要がある。

## 3-26 福岡県×フィジー

### (1) 背景と目標等

#### 1) 背景と目的

福岡県は九州北部に位置する拠点都市であり、充実したスポーツ施設、強豪校、大学スポーツ科学部等が集積している。県ではこれまで「世界から選ばれる福岡県」を目指し、海外とのスポーツ交流を推進してきた。ハワイ州やニューサウスウェールズ州とは MOU に基づく青少年相互派遣を実施するなど、継続的な国際スポーツ交流の実績を有している。

近年は国際ショナルトレーニングセンター構想のもと、オセアニア島嶼国との連携強化を重要施策として位置付けている。フィジー共和国はラグビーをはじめとするスポーツ分野で国際的な実績を有し、若年層の潜在的競技力も高い国である。令和5年の駐日フィジー共和国大使来県を契機に、スポーツを通じた交流推進について協議を重ね、MOU 締結を視野に入れた連携の方向性を共有してきた。

大阪・関西万博という国際的契機を活用し、両地域間の協力関係を具体化する好機を迎えた。

#### 2) 目標

本事業では、以下を目標とした。

- ・福岡県とフィジー共和国との間で、スポーツ分野における協力覚書（MOU）締結に向けた具体的協議を進展させること。
- ・本県のスポーツ施策、育成システム、施設環境に対する理解を深め、将来的な人的・指導者交流の基盤を構築すること。
- ・両地域のスポーツ行政、競技団体、学校、大学等のネットワークを形成し、継続的な交流枠組みを確立すること。
- ・万博を契機とした交流を持続的な地域間パートナーシップへと発展させること。

### (2) 事業内容

#### ■本事業の概要

- 県は「世界から選ばれる福岡県」を目指し、海外とのスポーツ交流を進めている。特にフィジーをはじめとしたオセアニア島嶼国は、国際ショナルトレーニングセンター構想の主要対象国となっている。
- この度、内閣官房の万博国際交流プログラムを活用し、フィジー共和国青年スポー

ツ大臣をはじめとするフィジー共和国スポーツ訪問団を本県に招へいし、県内スポーツ関係施設や強豪校等を視察していただき、本県のスポーツ施策の取組に対する理解を深めていただくとともに、本県とフィジー共和国との今後の連携につなげることを目的とするもの。

## ■ 9月20日（土）

### アクション福岡訪問 施設視察・タレント発掘プログラムの視察

- 施設概要、タレント発掘プログラムの説明を加隈スポーツ推進課長、木下スポーツ推進課健康科学係長、高木スポーツ企画課長から行い、同施設の見学、福岡県タレント発掘プログラムの取組を視察。その後、今後の本県との連携について意見交換を行った。

サウクル大臣は、「フィジーにはまだまだ才能がある若者がたくさんいる。この隠れている才能をアンロックしたいため、若い学生を育成するシステム、また世界に向けた道筋を示す教育やプログラムを日本で学び、フィジーに持ち帰って実践することが今回の訪日の目的です」と挨拶した。



施設見学



タレント発掘プログラム視察



今後の連携に関する意見交換



集合写真

## 筑紫台高等学校訪問 ラグビー部視察・フィジー留学生との交流

- 同校の概要を吉村総括教頭から説明いただき、今後の連携について意見交換を行った。また、同校にはフィジー共和国からの女子留学生2名（ルイジアナ・ツカナさん、ミリアマ・ブカさん）が2024年4月からスポーツ推薦の特待生として入学しており、受け入れにあたった経緯について北島ラグビー部監督から説明いただいた。受け入れる上での課題は『コスト面』。この2名については学費、生活費の全額を学校が負担しているため予算が逼迫している。留学生の受け入れは継続していきたいが、現状は検討中とのこと。
- その後、同校女子ラグビー部及び周辺の中・高生との合同練習の様子を視察するとともに、2名の留学生の学校生活や今後の進路についてなどを伺い、選手の皆様と交流を図った。



今後の連携に関する意見交換



ラグビー練習の視察



フィジーからの留学生との交流



集合写真

### 福岡市ヨットハーバー訪問 福岡第一高等学校ヨット部視察

- 福岡第一高等学校ヨット部の練習拠点である福岡市ヨットハーバーを訪問し、小田村ヨット部顧問、福岡セーリングクラブディレクターであり日本経済大学の坂口教授から活動内容等について説明いただいた。その後、ボートに乗船のうえ、同校、日本経済大学及び福岡セーリングクラブ（小学生から大学生が対象）の合同練習の様子を視察した。



概要説明



ヨットハーバー視察



ボート乗船



集合写真

### 福岡県主催歓迎夕食会／スポーツ関連団体との懇親会

- フィジー共和国スポーツ訪問団の来福を歓迎し、福岡県主催により後藤スポーツ局長をはじめとした県内スポーツ関連団体関係者との意見交換会を実施。

サウクル大臣は、「スポーツ振興についての私たちの目標はフィジーの若者たちに草の根レベルの活動から世界で活躍できるよう明確な道筋を提供できるようになること。今回の訪問を契機として、フィジーと福岡県の協力関係に関する覚書が締結されることを期待しております」と挨拶した。



大臣挨拶



集合写真

■ 9月22日（月）

南筑高等学校訪問 柔道部視察

- 全国有数の柔道強豪校で知られる南筑高等学校を訪問し、同校柔道部OBである原口県議同席のもと、山下校長、松尾柔道部顧問より活動内容を説明いただいた。その後、柔道部の練習の様子を見学し、部員の方々との交流を行った。訪問団は、日本ならではの礼儀を重んじる精神や規律を見て感銘を受けていた。



生徒による歓迎



意見交換



練習見学



集合写真

## 福岡大学訪問 学長表敬・スポーツ施設視察

○ 始めに永田学長を表敬訪問し、同大学の概要を説明いただいた。その後、下園スポーツ科学部教授に同行していただき、水泳施設、サッカー場、総合体育館、ラグビー場、陸上競技場、トレーニング施設の視察を行った。

訪問団は、フィジーに国立のスポーツ施設を作る構想があるとのことで、特にトレーニング施設の見学、スポーツ科学部の内容について重点的に確認していた。本大学のスポーツ施設を参考にしたいため、引き続き連携を深めていきたいとのことであった。



学長表敬



プール視察



ラグビー場視察



トレーニング施設視察

## オイスカ西日本研修センター訪問 施設視察・フィジー研修生との交流

○ オイスカ西日本研修センターを訪問し、廣瀬所長より施設概要を説明いただいた。

オイスカ研修生の皆様からは、フィジー伝統のカヴァ（大切な祝い事やお客様をおもてなしする場面で執り行われる儀式）の披露やパイプバンドによる演奏が行われた。

その後、フィジーからの研修生であるタワケ・アセリさんの生活の様子を見学し、日とフィジーの文化の違いや日本語習得までのプログラムなどについて伺った。



カヴァの披露



パイプバンドによる演奏



集合写真



お見送りの様子

## ■ 9月23日（火）

### 日本経済大学訪問 ラグビー部視察・フィジー留学生との交流

- 松本副学長より同大学の概要を説明いただいた。同大学の特徴としては、海外留学生を数多く受け入れており、現在大学全体の約半数（2025年：全学生5,741名中、留学生は2,675名）でありアジア圏を中心に40カ国からの留学生が在籍する。

松本副学長は、「本学は100を越える大学と教育提携を結んでいるが現在フィジーには提携校がない。今後提携を結んで学生の活躍やフィジーのスポーツ発展に協力していきたい。」と挨拶された。その後、同大学ラグビー部でフィジーからの留学生であるララバラブ・ナビユ・ウナイシさん同行のもと、ラグビー場、サッカー場、学生寮、食堂などを視察し、ウナイシさんの学校生活の様子を紹介していただいた。



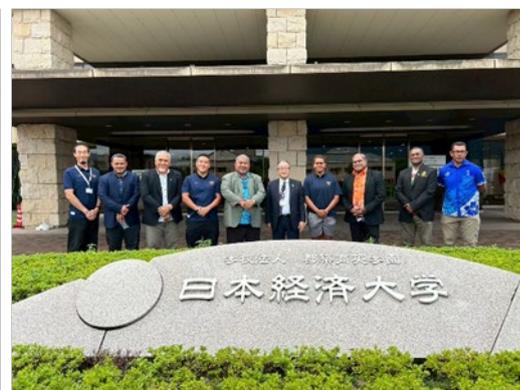
フィジーからの留学生による出迎え



意見交換



ラグビー競技場視察



集合写真

### 博多町家ふるさと館訪問 博多人形絵付け体験・館内見学

○ 同館は、明治・大正時代を中心に博多の暮らしや文化を広く紹介しており、博多の歴史や祭り、伝統などを感じて楽しむことができる施設。訪問団は、長谷川館長より概要説明をいただいた後、博多人形の絵付け体験、展示物の観覧、博多どんたくの歴史について学んだ。併せて近隣の櫛田神社を参拝し、山笠の展示を観覧するなど日本の伝統文化を体験した。



博多人形の絵付け体験



集合写真



手水をとる様子



山笠観覧

### JAPAN BASE 訪問 施設視察

- 同施設は日本ラグビーフットボール協会が所管する国内外の代表チームが滞在する国内唯一のラグビー強化拠点。松田室長、近俊室長補佐より施設概要について説明いただき、施設内を視察した。

フィジーにとってのラグビーは国民の約4人に1人が携わっている国民的スポーツであり、同施設の最先端設備について非常に関心を持っており、今後連携していくことが見込まれる。併せて同施設に実際に宿泊し、宿泊施設、選手の食事内容等体験した。



意見交換



施設見学



集合写真



施設内レストラン

## ■ 9月24日（水）

### 福岡県知事表敬

- 福岡県庁を訪問し、服部知事を表敬訪問した。

服部知事は、訪問団の来福を歓迎するとともに、フィジー共和国とのスポーツ分野における交流に触れ、「フィジーをはじめオセアニア地域の素晴らしい能力を持っている若い選手を本県にお迎えし、本県の選手と共に鍛えあって世界で活躍できるアスリートを育てていきたい。今後も本県とフィジー共和国との交流がさらに活発化することを期待する。」と挨拶した。

サウクル大臣は、「フィジーを含むオセアニア地域と福岡県との交流は、スポーツ分野にとどまらず、相互理解、経済成長などを促進する上で、きわめて重要な役割を果たす。今回の訪問がフィジーと福岡県の永続的なパートナーシップの始まりとなることを願っております。」と挨拶された。その後、両地域の今後の連携について活発に意見交換が行われた

## ■ 9月25日（木）

大阪・関西万博訪問 フィジーナショナルデーセレブレーション・レセプション参加  
大阪・関西万博を訪問し、フィジーナショナルデーイベントに参加した。

セレブレーションでは、フィジー共和国側からマノア・カミカミザ副首相、日本側から古賀内閣府副大臣が登壇し、現地ミュージシャンより伝統音楽のライブ演奏が行われたほか、舞踊の披露やカヴァの儀式が行われ、会場は大盛況であった。その他、フィジーパビリオンにおいて芸術作品の展示や織物、クラフト製作などを通じて、フィジー共和国の暮らしや価値観に触れることができるものであった。

その後のレセプションでは、現地の食事がふるまわれ、フィジー共和国の紹介、観光部門の紹介、迫力あるショーが披露された。総勢 300 人程の参加者がおり、日本、フィジー

共和国間の交流だけでなく、様々な分野での交流を行うことができた。



セレブレーションの様子



フィジーパビリオンの様子



レセプションの様子



レセプションの様子

### (3) 事業の目標に対する成果

本事業の実施により、福岡県とフィジー共和国との間で、スポーツ分野における協力覚書（MOU）締結に向けた具体的な協議が進展した。

県内スポーツ施設、強豪校、大学、競技団体等との直接交流を通じて、両地域の関係者間に信頼関係が構築され、将来的な人的交流・指導者交流に向けた基盤が形成された。

また、大阪・関西万博のナショナルデー参加を通じ、万博を契機とした交流を継続的な地域間パートナーシップへ発展させる方向性を確認することができた。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価) )

本事業は、大阪・関西万博という国際的な舞台を契機として、福岡県とフィジー共和国とのスポーツ分野における関係性を具体的な協議段階へと進展させた点に意義がある。万博ナショナルデーへの参加を含む一連の交流を通じ、両地域の行政トップおよびスポーツ関係者間において相互理解と信頼関係が深化した。

特に、フィジー共和国青年スポーツ大臣をはじめとする訪問団が本県の育成システムや施設環境を直接視察したことにより、MOU 締結に向けた協力の方向性が明確化され、万博後も継続的な連携を図る基盤が構築された。

万博会期後においても、オンライン協議や相互派遣等を通じた交流の具体化を進めることで、スポーツを軸とした持続的な地域間パートナーシップへと発展させることが期待される。本事業は、万博を一過性のイベントにとどめることなく、国際スポーツ交流のレガシー創出につながる契機となったものである。

## (5) 参加者にとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

フィジー共和国の大臣や留学生等との直接交流を通じ、参加した生徒・関係者は、スポーツを通じて世界とつながる可能性を実感する機会となった。

## (6) 特に良かった点、苦労した点

### 1) 良かった点

フィジー共和国青年スポーツ大臣をはじめとする訪問団を招へいし、本県のスポーツ施設や育成システムを直接視察いただけたことにより、MOU 締結に向けた具体的な協議が大きく進展した点が良かった。

また、知事表敬や万博ナショナルデー参加を通じ、行政トップレベルでの信頼関係を構築できたことは大きな成果であった。

### 2) 苦労した点

短期間で多くの視察先・関係団体との調整を行う必要があり、日程調整や受入体制の整備に苦慮した。

また、通訳対応や文化的配慮を含め、相手国の事情を踏まえた調整に一定の時間と労力を要した。

## (7) 今後の展開

今後は、MOU 締結を正式に実現し、オンライン協議や指導者・選手の相互派遣等、具体的な交流事業へと展開していく。

県内競技団体や大学、スポーツ施設と連携し、行政主導に依存しない実務レベルでの交流体制を構築することで、自走可能な枠組みを整備する。

また、インターナショナルトレーニングセンター構想の一環として位置付け、予算措置や関係機関との連携を通じて継続性を確保していく。

## (8) 今後の展開における課題

万博という大きな契機が終了した後も、交流を継続的な取組として定着させるためには、安定的な財源確保および実務を担う体制整備が必要である。

また、距離的制約を踏まえ、対面交流とオンライン交流を組み合わせた効率的な交流モデルを構築することが課題である。

さらに、競技団体や教育機関が主体的に参画し続ける仕組みを確立することが求められる。

### 3-27 福岡県福岡市 × アラブ首長国連邦、カタール、サウジアラビア

#### (1) 背景と目的

西日本・九州の自治体が連携し、高付加価値旅行者等をメインターゲットに、大阪より西側にある自治体の魅力的な観光資源を広域的な周遊ルートとして発信し、西日本・九州の誘客促進につなげることを目的に「西のゴールデンルート」の取組みを進めているところである。

その中で、メインターゲットである高付加価値旅行者が多数見込まれるサウジアラビア王国、アラブ首長国連邦（UAE）及びカタールの3ヶ国（以降、中東3ヶ国という）との国際交流を発展させることで、西のゴールデンルートの認知拡大や中東地域からの誘客促進につながる経済交流の機会創出を図るもの。

#### (2) 事業内容

##### ① スケジュール

採択通知後、速やかに相手国との関係構築に努め、パビリオン館長やイベントチーフ、広報マネージャーとの交渉を開始した。どの国も前向きに検討いただき、予定していた事業を実施することができた。

##### ② 体制

自治体：西のゴールデンルート実行委員会（19自治体）のうち、6自治体が本プログラムに参画（姫路市・岡山市・下関市・北九州市・福岡市・熊本市）。

相手国：パビリオン館長や大使館職員など

##### ③ 内容

##### (A) 相手国の万博関係者等の招聘

##### a) UAE 関係者 FAM ツアー

|     |              |
|-----|--------------|
| 日時  | 令和7年9月21-22日 |
| 内容※ | 姫路・岡山コース     |
| 参加者 | 2名           |



※コース詳細

|       |  |
|-------|--|
| 姫路・岡山 | (姫路市) 迎賓館→姫路城→やまさ蒲鉾<br>(岡山市) 岡山城→後樂園→オリエント美術館→ハラル情報交流会→吉備津神社 |
|-------|--|



b) サウジアラビア関係者 FAM ツアー

|     |                       |
|-----|-----------------------|
| 日時  | 令和7年9月25-26日          |
| 場所  | 下関市・北九州市・福岡市・熊本市      |
| 内容※ | 下関・北九州コース<br>福岡・熊本コース |
| 参加者 | 4名                    |

※コース詳細

|        |   |
|--------|---|
| 下関・北九州 | (北九州市) 小倉城・小倉城庭園→魚文化情報交換会<br>→TOTO ミュージアム→漫画ミュージアム→門司港レトロ<br>(下関市) 関門海峡クルーズ→海響館<br>→ふぐ文化情報交換会と先帝所作体験<br>→和菓子作り・茶道体験 |
| 福岡・熊本  | (熊本市) 水前寺成趣園→熊本城→武蔵館道場・居合体験<br>(福岡市) 中村人形ギャラリー視察・書道アート体験→大濠公園<br>→門田提灯(博多祇園山笠でも使われている「提灯」の<br>絵付け体験)<br>→博多旧市街      |



c) サウジアラビア王国大使館関係者 FAM ツアー

|     |                          |
|-----|--------------------------|
| 日時  | 令和7年11月23-24日            |
| 場所  | 姫路市・岡山市・下関市・北九州市・福岡市・熊本市 |
| 内容※ | 姫路・岡山コース                 |
|     | 下関・北九州コース                |
|     | 福岡・熊本コース                 |
| 参加者 | 13名                      |

※コース詳細

|        |  |
|--------|--|
| 姫路・岡山  | (姫路市) 迎賓館→姫路城→好古園<br>(岡山市) 岡山城→後楽園→オリエント美術館→ハラル情報交流会→吉備津神社   |
| 下関・北九州 | (北九州市) 小倉城・小倉城庭園→魚文化情報交換会<br>→TOTO ミュージアム→漫画ミュージアム<br>→門司港レトロ展望台<br>(下関市) 唐戸市場→カモンワーク→関門海峡クルーズ<br>→ふぐ文化情報交換会と先帝所作体験<br>→和菓子作り・茶道体験 |
| 福岡・熊本  | (熊本市) 水前寺成趣園→魚文化交流会→武蔵館道場・居合体験<br>→熊本城→島田美術館<br>(福岡市) 博多曲物ワークショップ→大濠公園<br>→門田提灯(博多祇園山笠でも使われている「提灯」の<br>絵付け体験)<br>→博多旧市街            |



(B) ナショナルデーを契機とした交流

a) カタール・ナショナルデー (7月8日)

公式行事への参加およびカタールメディアからの取材。カタール政府関係者やカタールパビリオン関係者との交流は実現できなかったが、同日、UAE・サウジアラビアパビリオンにて観光に関する意見交換会を実施。

相手国参加者：UAE…MARIAM SALEM AL MEMARI (政府副代表、パビリオ)

ン事務局長)  
サウジアラビア…Ms. Lama Alghair / Mr. Youse f Abusyuni  
(International Participants Department)



b) アラブ首長国連邦・ナショナルデー (9月18日 - 19日)  
公式行事への参加およびアブダビ文化観光局とのビジネスミーティングを実施。ビジネスミーティングでは、各自治体の観光に関する紹介のほかに中東エリアへの効果的な情報発信について意見交換を実施。

相手国参加者：International Operations (APAC) Regional Head MS. Min Xu



c) サウジアラビア王国・ナショナルデー (9月23日 - 24日)  
公式行事およびビジネスフォーラムへの参加。また、サウジアラビア政府観光局との意見交換会を実施。

相手国参加者：サウジアラビア政府観光局支局 局長および小早川薫氏



(C) 中東3ヶ国市場向けプロモーション

中東エリアにおいて影響力のあるインフルエンサー2名を活用した現地訴求型のプロモーションを実施。インフルエンサーである本宮郁士氏 (@navito\_halal) および Sara Khalil 氏 (@sara\_world\_eginjp) を、参画自治体（姫路市・岡山市・下関市・北九州市・福岡市・熊本市）に招請し、各自治体におけるハラル対応や観光コンテンツを体験するFAMツアーを3泊4日で実施。各自治体のコンテンツを実際に体験いただくとともに、中東目線でフィードバックいただき、ハラルの受入環境やこういった体験コンテンツが中東エリアに興味関心を得られるのかなどについて学ぶ機会となった。実際に体験いただいた内容は、それぞれのアカウント (Instagram や YouTube) に投稿。

(効果)

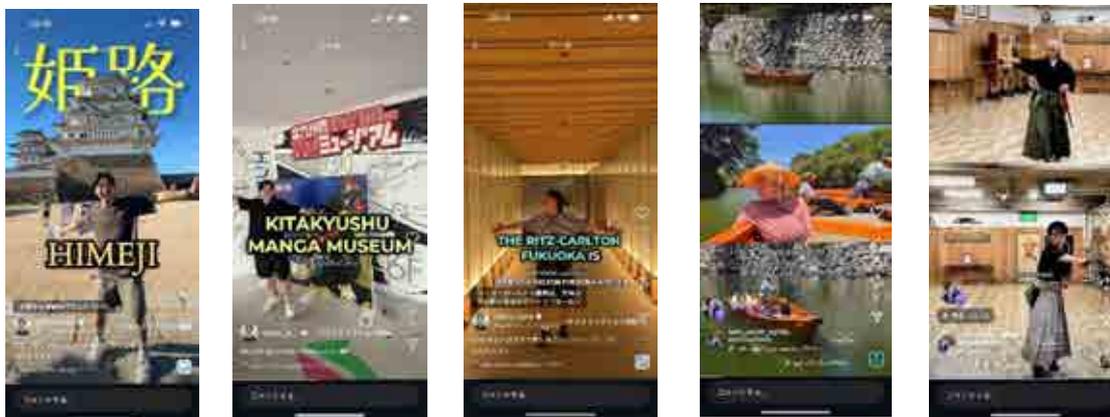
(A) ~ (C) の事業を通して、中東3ヶ国と自治体、事業者と自治体、自治体間の連携など国際交流にとどまらずさまざまな業種の方との関係構築につながった。中東エリアからの訪日を受け入れるにはハラル対応が不可欠でありながら、自治体として受入環境が整っていない、またどうやって整備していくか分からないといった声をFAMツアーの中でお互いに意見交換することで、中東文化への理解を深めるとともに中東3ヶ国の方にも日本文化を知っていただく機会となった。



| @navito_halal |         |
|---------------|---------|
| Instagram     | リール再生回数 |
| 姫路市           | 135,000 |
| 岡山市           | 137,000 |
| 福岡市           | 185,000 |
| 下関市           | 140,000 |
| 北九州市          | 137,000 |
| 福岡市           | 185,000 |
| 熊本市           | 212,000 |



|                    |         |
|--------------------|---------|
| @sara_world_eginjp |         |
| Instagram          | リール再生回数 |
| 姫路市・岡山市            | 2,366   |
| 下関市・北九州市           | 3,244   |
| 福岡市・熊本市            | 3,044   |



### (3) 事業の目標に対する成果

当初の目標であった中東の高付加価値旅行者を誘客していくための取組みとして、各自治体と事業者にはハラルをはじめとする文化や歴史背景に対する理解を深めることができた。万博を契機として、中東3ヶ国との交流により大使館や観光局と関係を築くことができ、今後の行政の取組みに繋がる人脈づくりとなった。また、体験コンテンツ等を提供する事業者が相手国参加者と接することで、実際に求められているニーズを知ることができ、情報発信の方法・コンテンツの改善点など新たな気づきの機会となった。

### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与(大阪・関西万博閉会後の事業継続性(相手国との関係性の評価))

万博を契機として、西日本エリアに多くのインバウンドが来訪するなかで、高付加価値旅行者層が多く見込まれる中東エリアとの交流を実施したことにより、ニーズを改めて知る機会となり、高付加価値旅行者層の来訪増加を目指す西のゴールデンルートとしても学びの多い国際交流となった。

相手国とは、万博終了後も交流継続を図っており、令和6年12月11日にはサウジ

アラビア王国大使館を訪問し、サウジアラビアへのプロモーション活動の相談や相互送客を含めた協議を実施。引き続き良好な関係を維持することで、中東からの誘客の実現に努める。



(参加自治体：福岡市・熊本市)

## (5) 今後の展開

引き続き西のゴールデンルートでは、高付加価値旅行者層の誘客に努める。

## (6) 今後の展開における課題

中東エリアも含めた幅広い国・地域において西のゴールデンルートの情報を発信し、様々なプロモーションを通じて認知拡大を図る必要があるが、自治体連携の一環で実施しているため、予算面や等については今後も協議および検討が必要である。

## 3-28 佐賀県佐賀市× トンガ

### (1) 背景と目標等

#### 1) 申請経緯

佐賀市に拠点を置く「認定 NPO 法人地球市民の会」(以下、「地球市民の会」という。)は、2022 年 1 月に発生したトンガ海底火山の大噴火を契機に、トンガ王国政府と、教育及び災害復興の分野において両当事者の協力を促進するための MOU (覚書) を締結し、現在は、経済的に困窮する家庭の高校生が、教育の機会を失うことなく継続して高校に通えるよう、トンガ復興支援奨学金による支援などを行っている。今後、トンガ王国との関係をより強化し継続的なものにするために、万博国際交流プログラムを活用して、青少年を中心とした人材交流を実施したいとの地球市民の会からの要請を受け、佐賀市がプログラム登録自治体となって申請するもの。

#### 2) 背景と目的

佐賀市とトンガ王国は台風や豪雨による道路、住宅の冠水、農作物への被害など、自然災害に関する共通の課題を抱えている。

本事業は、万博国際交流プログラムを活用し、気候変動や自然災害に強い持続可能な社会を将来支える担い手である青少年等を対象として、環境及び防災に関する理解と知識を深める機会を提供するとともに、異文化交流を通じて多文化理解の促進を図ることを目的として実施するものである。

#### 3) 目標

① 気候変動及び自然災害への対策」を、佐賀市とトンガ王国の青少年交流を通じて双方で学び合い、知の共有を行うことで、市民の環境、防災に関する意識が高まり、持続的かつ災害に強いまちづくりが推進される。

② トンガ王国が力を入れている「ラグビー」や「伝統舞踊」などのスポーツ・文化交流を行うことで、市民の異文化理解が深まり、多文化共生社会が推進される。

## 事業実施体制



## 令和7年度事業スケジュール



## (2) 事業内容

### 1) 大阪・関西万博トンガ・ナショナルデーへの参加 (4月)

大阪・関西万博のトンガ王国関係者との交流促進及びトンガ王国の文化を知るため、トンガ・ナショナルデーへの参加、トンガ王国パビリオンの視察を実施。

#### ① スケジュール

4月17日(水)：佐賀 — 大阪(万博会場) 移動

4月18日(木)：ナショナルデー参加、関係者と打合せ、スケジュール調整

4月19日(金)：大阪(万博会場) — 佐賀 移動

② 参加者

【トンガ王国】

・政府：トンガ王国観光省 CEO Mr.Viliami Takau、Pita Hausia

【佐賀市】

・主催：佐賀市（国際課）  
・共催：地球市民の会 ※受託者

③ 内容

【大阪・関西万博会場】

■日時：4月18日（木） 9：00～18：00

■訪問者：訪問者：4名（地球市民の会：藤瀬伸恵、大熊奨、牧野沙也香、深川千幹）

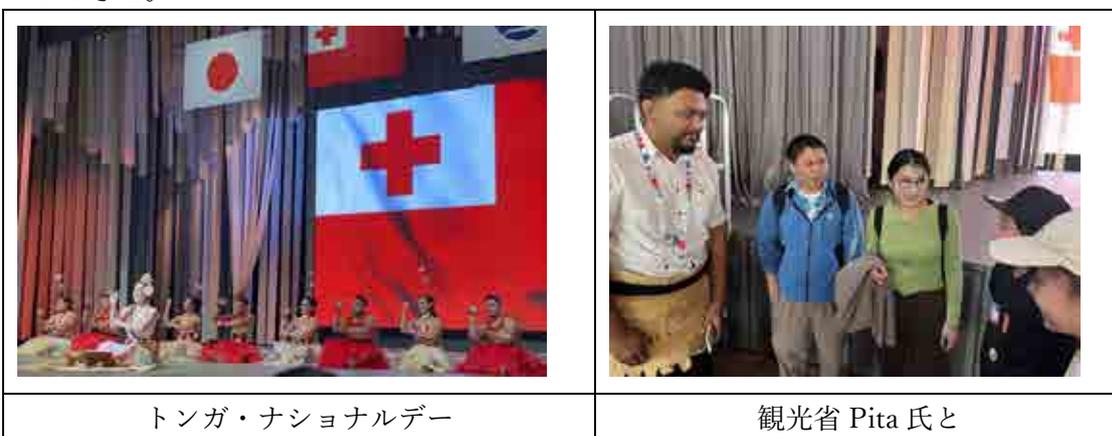
■面談者：トンガ王国観光省 CEO Mr.Viliami Takau, Pita Hausia

■内容：

・トンガ王国のナショナルデーへの参加及びパビリオンの見学  
・トンガ王国観光省職員との顔合わせ、8月の招へいに関する打ち合わせ

トンガ王国政府において大阪・関西万博を管轄する観光省の担当職員との面会により、8月に予定している交流事業に関し、入場チケットの確保やパビリオン見学等について協力を得られることになり、8月の交流事業に向けた協力体制の拡充につながった。

さらに、ナショナルデーへの参加を通じて、今後交流を予定している佐賀市「夢の学校」の生徒たちが、トンガの文化に強い関心を示し、交流事業に向けた機運を一層高めることができた。



2) トンガ訪問事業～佐賀市からトンガを訪問（6月）～

8月の招へい事業に向けて、招へい者、佐賀市滞在中の行程、取組等について最終調整を行った。

あわせて、海底火山噴火や水害等により被災した地域の現地視察を実施し、災害発生時の対応状況や、その後の復旧・復興に向けた対応措置、支援の在り方等について、災害対応に関係する政府機関や関係団体との意見交換を行った。

さらに、トンガ王国における異文化交流の実情を把握するとともに、青少年交流や相互

理解の深化に資する知見の収集を図った。

① スケジュール

期間：2025年6月18日（水）～25日（水）（滞在は6/19-24、スケジュール別添）

② 参加者

【トンガ王国】

- ・政府：駐日トンガ王国大使館、観光省、内務省、教育訓練省、国家災害管理局
- ・学校：トンガハイスクール、エウアハイスクール、ハアパイハイスクール
- ・民間：Tonga National Youth Congress
- ・現地コーディネーター：Koheleti Tupou 氏
- ・現地サポート：在トンガ日本大使館

【佐賀市】

- ・主催：佐賀市（国際課）末次悦子
- ・共催：地球市民の会 ※受託者 藤瀬伸恵
- ・防災アドバイザー：佐賀災害支援プラットフォーム 山田健一郎

③ 内容

【在トンガ王国日本国大使館】

■日時：6月20日（金） 10：00～10：30

■面談者：稲垣特命全権大使、中野書記官

■内容：

- ・万博国際交流プログラムの趣旨説明
- ・トンガ王国招へい（訪日）メンバーや日程の説明
- ・トンガ王国招へい（訪日）メンバーの表敬訪問受入のお願い
- ・渡航手続等について確認



稲垣在トンガ王国日本国特命全権大使



在トンガ王国日本国大使館

【内務省 Ministry of Internal Affairs】

■日時：6月20日（金） 14：00～14：50

■面談者：CEO Mrs.Akanesi Polotu Paunga、 副 CEO Sinama Tupou

■内容：

- ・万博国際交流プログラムの趣旨説明
- ・内務省の防災や青少年課の取り組みについて意見交換
- ・佐賀市への内務省職員派遣依頼
- ・佐賀市でのプログラムに期待することについて確認

トンガ王国では現在、青少年に関する政策の見直しが進められており、その中で防災・減災の視点についても言及され、国家レベルにおいて青少年の人材育成や能力向上の在り方について検討が行われているとのこと。

災害に対するレジリエンスを高めるためには、平時から青少年が自ら生活を支え、地域を担う力を身に付けていることが重要であるため、今回プログラムについて、青少年育成の観点に加え、災害対応や防災意識の向上の面においても学ぶ点が多いものとして、大きな期待が寄せられた。

これを受け、日本で実施予定の研修日程や内容について説明を行うとともに、今後の取組の方向性について協議を行った。

|   |  |
|---|--|
|  |  |
| 派遣されることになった<br>副 CEO Sinama 氏   | CEO Akanesi 氏と   |

【教育訓練省 Ministry of Education and Training】

■日時：6月20日（金） 15：00～16：00

■面談者：CEO Mr. Isikeli Oko

■内容：

- ・8月の招へい対象生徒選定、引率教員派遣の依頼
- ・佐賀市内での受け入れプログラム説明
- ・トンガの教育事情や学校での防災に関する情報交換
- ・気候変動教育など今後の方針について

トンガ王国における教育現場の課題についてヒアリングを行い、経済的・地理的要因等により学校に通うことが困難な状況があることや、日本と同様に教員不足（人材がニュージーランドやオーストラリアへ流出）、教育の質に関する課題が存在することについて説明を受けた。あわせて、近年は防災や気候変動への対応にも力を入れており、教育分野と連動した取組が進められていることについて共有された。



#### 【被災地視察】

■日時：6月21日（土）終日

■場所：トンガタプ島内の津波被災地域

■内容：

- ・現地確認（トンガタプ島の概要説明、津波被害のあったハアタフビーチ、アタタ島からの移住コミュニティ視察、海沿いの低地のコミュニティなど）

トンガ王国は大小170余の島々の4つの諸島から形成されている。津波の被害により島民全員が避難を余儀なくされた離島もあり、避難移住民のための居住エリアが形成されていた。

また、津波被害により消滅しているリゾートエリアもあり復旧の目途はたっていない。

トンガ王国においても、島国特有の地理的条件により、台風や豪雨等の自然災害が発生すると、物流や支援体制が制約されやすいことから、平時からの防災対策及び人材育成が重要な課題となっている。



**【招へいプログラム オリエンテーション】**

■日時：6月23日（月）10：00～11：30

■場所：トンガハイスクール

■参加者：Siaosi Tupou, Sinama Tupou, Mause Halahala, Mila Ngaue, Kalisi Veikoso、Feleti（高校生）、

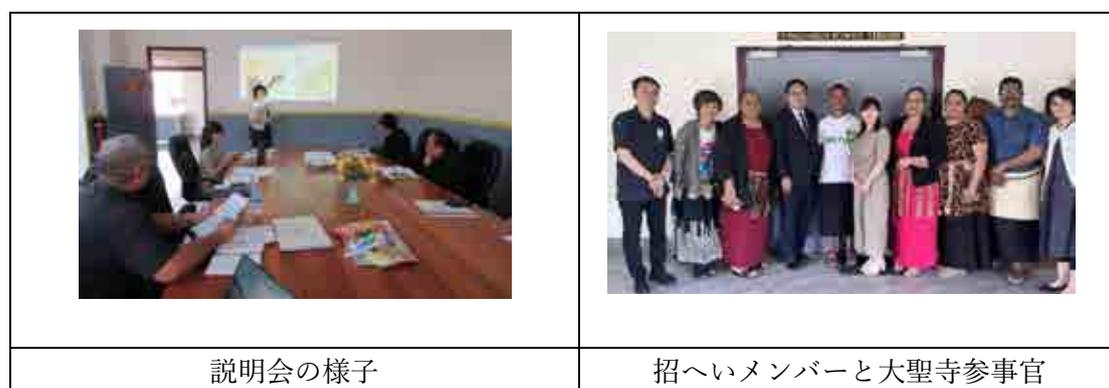
オブザーバー参加：在トンガ王国日本国大使館参事官 大聖寺氏

■内容：

- ・佐賀市の紹介
- ・万博国際交流プログラム説明
- ・日本渡航及び滞在時の注意事項の案内
- ・VISA 手続きについて説明

佐賀市を訪問予定の招へい対象者に対し、招へいプログラムの内容について説明を行った。あわせて、佐賀市の地形、文化、名産品等について紹介し、市の魅力に関する情報提供を行った。

特に日本酒や温泉といった分野に強い関心が示され、招へい者が本事業に対する期待を一層高めている様子が見られた。



【観光省 Ministry of Tourism】

■日時：6月23日（月） 14：00～15：00

■面談者：CEO Villiami Takau

■内容：

- ・万博国際交流プログラム事業の取組みや概要説明
- ・大阪・関西万博でのトンガパビリオン訪問時の受入依頼
- ・トンガの観光事情についての意見交換

大阪・関西万博を所管するトンガ王国観光省のCEOからは、本事業に対する全面的な協力について心強い意向が示された。あわせて、佐賀市およびトンガ王国の高校生が同国パビリオンを訪問する際には、受入れを担当する現地スタッフが、パビリオン内での交流や文化体験等について協力することについて了解を得ることができた。

また、トンガ王国における観光業はマリリゾートを柱としていることから、津波等、海に影響を及ぼす事象への取組を重視しており、観光省内にユースを中心とした専門チームの設置も視野に入れているとの説明があった。このため、本プログラムに参加するトンガ王国の学生が、将来的にこうした取組に参画できる仕組みづくりにつながることを期待される。



観光省 CEO Villiami 氏への表敬

【国家防災管理局 NDRMO】

■日時：6月23日（月） 15：00～17：00

■面談者：Ofa Masiwawa, Kalisi Vaikoso

■内容：

- ・2022年海底火山噴火・津波被害の被災状況と復興状況の説明
- ・災害対応の課題と今後の計画
- ・交流参加予定者との意見交換

現在のトンガ王国における防災の取組についてヒアリングを実施した。主に、CSO等の民間団体や市民とどのように連携し、防災・災害対応を行っているかについて意見を聴取するとともに、佐賀災害支援プラットフォームのような官民連携の取組を、今後のトンガ王国における防災体制の強化に活用できる可能性について意見交換を行った。

また、佐賀市で実施予定の研修プログラムにおいては、防災や気候変動への取組に関する学びの中核的な役割を担い、参加者の学習を先導していただくよう依頼した。



【Tonga National Youth Congress】

- 日時：6月24日（火）9：00～10：30
- 面談者：プロジェクトコーディネーター Mausa Halahala
- 内容：
  - ・ NGO の災害支援や防災支援の取組みについて共有
  - ・ 連携の可能性について打診

人道支援、防災、災害対応等の活動を行う NGO である TNYC において意見交換を実施した。佐賀市における民間団体と行政が連携した災害対応の取組について説明を行うとともに、トンガ王国における現状や、同様の取組の有無についてヒアリングを行った。

その結果、トンガ王国においても NGO 間のネットワークを強化する動きが進められていることが共有され、今後、こうした取組がさらに発展するよう、相互に協力していく可能性について意見を交わした。



【駐日トンガ王国大使館】

■日時：6月25日（水） 11：00～12：30

■面談者：特命全権大使 Dr.Tevita Suka Mangisi 氏ほか

■内容：

- ・トンガ王国渡航の報告
- ・万博国際交流プログラムの趣旨説明
- ・今後の佐賀市とトンガの連携の発展可能性について協議



④ 効果（トンガ王国訪問事業）

A. 市内への波及効果

トンガ王国との8月の招へい事業に向け、プログラム内容に関する意見交換及び最終調整を行った結果、事業効果を高めるための実施体制及び具体的なプログラムの準備が整った。

また、訪問を通じて、トンガ王国政府、在トンガ日本国大使館及び駐日トンガ王国大使館等との連携体制の構築や、今後の交流継続につながる人的ネットワークの形成が図られた。

B. 実施により達成できた成果

本事業を通じて、トンガ王国における被災状況、防災の取組及び文化に対する理解を深めるとともに、双方が有する知見や経験を共有することができた。これにより、佐賀市で実施する防災ワークショップの企画や文化交流プログラムへ反映させることができた。また、招へい事業の実施に向けて、参加者及びプログラム内容に関する最終調整を行うとともに、ビザ申請手続きに必要な情報収集を進め、在トンガ王国日本国大使館及び駐日トンガ王国大使館等との協力体制を整えることができた。

C. 相手国への波及効果について

佐賀市の魅力及び本プログラムに対する理解が深まるとともに、8月の来日に向けて、佐賀市への招へい時におけるトンガ王国側の各組織の役割分担が明確化された。

3) トンガ王国招へい事業～トンガ王国から佐賀市への招へい（8月）～

- ・参加型によるSDGs（主に防災、気候変動をテーマ）に関するワークショップ実施
- ・大阪・関西万博への参加
- ・トンガの伝統舞踊や文化等を紹介する異文化交流の実施
- ・学校や保育園等の訪問交流
- ・スポーツ（ラグビー）等交流
- ・災害対応に取り組む佐賀のCSO等の団体及び佐賀市との防災に関する意見交換の実施
- ・市民ボランティアによるホームステイ

① スケジュール

5月 招へい者調整

6月 トンガ渡航、8月招へいスケジュール調整、フライト等手配、参加者募集、ホストファミリー募集

7月 説明会、ホームステイマッチング、最終スケジュール調整

8月 招へい

② 参加者

【トンガ王国】

- ・政府：駐日トンガ王国大使館、観光省、内務省、教育訓練省、国家災害管理局
- ・学校：トンガハイスクール、エウアハイスクール、ハアパイハイスクール
- ・民間：Tonga National Youth Congress
- ・現地コーディネーター：Koheleti Tupou 氏
- ・現地サポート：在トンガ王国日本国大使館

【佐賀市】

- ・主催：佐賀市（国際課）
- ・共催：地球市民の会 ※受託者
- ・協力者：東洋大学、特定非営利活動法人日本トンガ友好協会、佐賀災害支援プラットフォーム、JICA 海外協力隊トンガOV会

<招へい実績>

- ・期間：2025年8月1日（金）～14日（木）（日本滞在8/2-13、スケジュール別添）
- ・招へい者：11名（内務省副長官、エウア高校校長（教育訓練省）、国家災害管理局員  
Tonga National Youth Congress プロジェクトコーディネーター、

トンガ高校2名、エウア高校2名、ハアパイ高校2名、通訳兼コーディネーター  
(2)内容

【大阪・関西万博 ブルーオーシャンドーム】

■日時：8月3日（日） 10:00～11:00

■場所：ブルーオーシャンドーム

■訪問者：18名(トンガ招へい者11名、東洋大学松丸教授、ボランティア学生4名、地球市民の会 藤瀬、他引率1名)

■内容：

- ・海洋プラスチック問題について（海の現状と課題を知り学習した）
- ・施設見学

【大阪・関西万博 トンガパビリオン】

■日時：8月3日（日） 12:30～14:00

■場所：トンガパビリオン

■訪問者：27名（トンガ招へい者11名、佐賀市からの高校生6名、東洋大学松丸教授（解説及び引率役）、ボランティア学生4名、地球市民の会：3名、その他引率2名、学校関係者1名）

■面談者：トンガ王国観光省、Talanoa Fifita 他、観光省職員2名

■内容：

- ・展示説明
- ・カヴァセレモニーの実演
- ・トンガ側対応者との交流、パビリオン見学等



カヴァセレモニーの様子



佐賀市・トンガの高校生対面

【佐賀市長表敬】

■日時：8月4日（月） 16:00～

- 場所：佐賀市役所
- 参加者：トンガ王国招へい者 11 名
- 内容：次第別添
  - ・招へい者と市長及び副議長の意見交換など
  - ・地元テレビ局の取材有



【ウェルカムパーティー】

- 日時：8月4日（月） 18:00～20:00
- 場所：グランデはがくれ
- 参加者：
  - ・トンガ側：駐日トンガ王国大使館特命全権大使 Dr. Tevita Suka Mangisi、  
トンガ招へい者 11 名、日本トンガ友好協会代表 ラトゥ シナリ氏
  - ・佐賀市側：佐賀市長、佐賀市議会副議長、総務部副部長、国際課等 7 名、  
ほかゲスト 14 名、関係者 8 名、そのほかパフォーマンス等関係者 約 30 名
- 内容：次第別添
  - ・オープニングアクト（書道）
  - ・駐日トンガ大使、市長からの挨拶
  - ・トンガ招へい者によるトンガ舞踊
  - ・空手演武
  - ・4月ナショナルデー参加の小学生による発表 等



【佐賀市危機管理防災課】

■日時：8月5日（火） 9:00～10:00

■場所：佐賀市役所

■訪問者：5名（トンガ招へい者4名：国家防災管理局,TNYC、内務省、  
通訳兼コーディネーター、地球市民の会 藤瀬）

■面談者：佐賀市危機管理防災課 牛島

■内容：

- ・佐賀市の地形、災害の特徴、防災の概要について共有
- ・佐賀市及び日本の災害時の対応について
- ・佐賀市危機管理防災室施設見学



【佐賀市災害三者連携会議（市協働推進課、社会福祉協議会、佐賀災害支援プラットフォーム）】

■日時：8月5日（火） 10:30～11:30

■場所：ほほえみ館

■訪問者：5名（トンガ招へい者4名：国家防災管理局,TNYC、内務省、  
通訳兼コーディネーター、地球市民の会 藤瀬）

■面談者：市協働推進課、社会福祉協議会、佐賀災害支援プラットフォーム

■内容：

- ・三者連携の概要の説明
- ・各組織の取組み紹介
- ・トンガ NDRMO の活動紹介
- ・意見交換



【佐賀大学】

■日時：8月5日（火） 9：30～11：30

■訪問者：11名

（トンガ招へい者：高校生6名、引率の先生1名、

地球市民の会：大熊奨、牧野沙也香／実行委員：深川千幹、尾上香織）

■面談者：佐賀大学国際課、光武進教授、金美連准教授、他7人

■内容：

- ・留学制度についての説明
- ・海洋エネルギーに関する先端的な研究の紹介
- ・総合分析実験センターの見学



【佐賀市清掃工場】

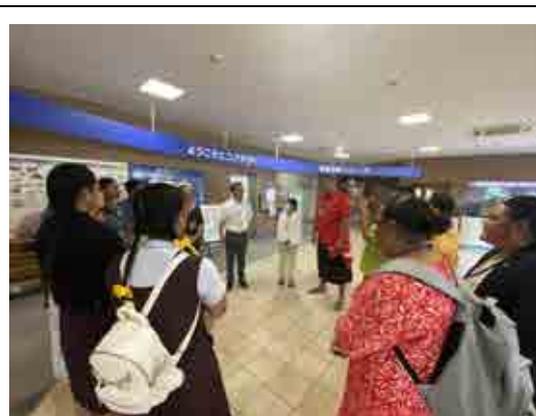
■日時：8月5日（火） 14：00～15：30

■訪問者：17名（トンガ招へい者11名、地球市民の会：藤瀬伸恵、大熊奨  
実行委員：深川千幹、山下宗久、尾上香織、西依勇輝）

■面談者：佐賀市循環型社会推進課 江川雅之

■内容：

- ・清掃工場内視察
- ・バイオマス産業都市構想、二酸化炭素分離回収設備などの概要説明



担当者から佐賀市内の廃棄物に関する説明

【サガテレビ】

■日時：8月5日（火） 16：00～16：30

■訪問者：17名（トンガ招へい者11名、地球市民の会：古川久美子、大熊奨、  
実行委員：深川千幹、山下宗久、尾上香織、西依勇輝）

■場所：サガテレビ

■内容：

- ・サガテレビ「てれび宣伝隊」の生放送にて、8月10日開催のトンガフェスを告知
- ・サガテレビ社屋の見学を実施



【佐賀市立川副中学校】

■日時：8月6日（水） 9：00～11：00

■面談者：市立川副中学校 約62名（1年:24人 2年:5人 3年:24人 職員:9人）

■内容：

- ・吹奏楽による歓迎演奏、浴衣体験、箏演奏体験
- ・ラグビー交流、シピタウ体験
- ・地元テレビ局の取材有



【佐賀私立龍谷中学・高等学校】

■日時：8月6日（水） 13：30～16：30

■面談者：龍谷中学校・龍谷高等学校 生徒等 約100名

■内容：

- ・高校生による佐賀における災害のプレゼンテーション
- ・国際交流、日本文化体験（習字、だるま作りなど）、トンガの踊り紹介



【認定こども園ひなた村自然塾】

■日時：8月7日（木） 10：00～11：00

■面談者：教師、園児等 約100名

■内容：

- ・子どもたちによる日本の遊び紹介
- ・子どもたちの歌の披露、トンガ踊りの披露



【北山少年自然の家：ワークショップ実施】

■日時：8月7日（木）16：00～18：00～8月8日（金）09：00～16：00  
（1泊2日）

■参加者：トンガ招へい者11名、地球市民の会5名、東洋大学教授1名、大学生5名、佐賀高校生6名、実行委員2名、万博運営1名、佐賀市2名、JICA九州2名

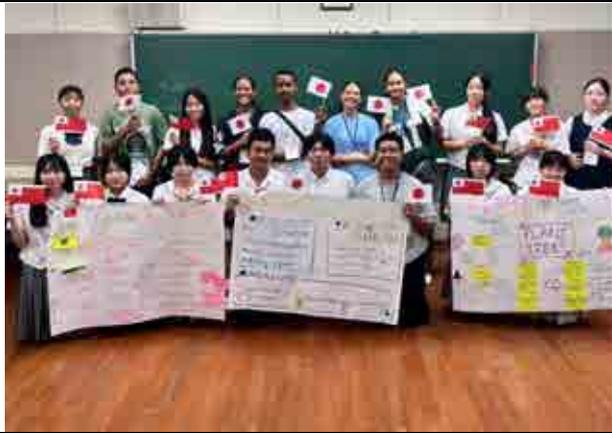
■場所：佐賀県北山少年自然の家

■内容：

- ・自己紹介・アイスブレイク、2日間のワークショップ概要説明
- ・高校生による事前課題の発表（佐賀市とトンガの気候変動・災害リスクの紹介）
- ・防災キャンプ（ソーラーランタンを利用し、一夜を過ごす）
- ・東洋大学松丸教授による気候変動に関する講義
- ・未来共創ワークショップ実施（3グループに分かれて、レジリエントな未来の町を考える）
- ・発表・振り返り
- ・地元新聞社等の取材有り



グループワーク



3チームの発表シート

【ホームステイ】

■日時：8月8日（金）夜～ 8月10日（日）朝まで

■受入：市民ボランティアホストファミリー8組（公募）



ホストファミリーとの集合写真

【トンガ・ジャパンフェス in Saga】

■日時：8月10日（日） 13：00～15：00

■場所：エスプラッツホール

■参加者：トンガ招へい者 11名、運営スタッフ 30名、一般参加 約150名

■内容：チラシ別添

- ・トンガの文化紹介、踊りのパフォーマンス
- ・日本の文化紹介ブース（縁日、茶道、着付け等）、和太鼓パフォーマンス
- ・トンガ文化紹介ブース（衣装、タパクロス、色塗り等）
- ・地元新聞、テレビ局の取材有



一般市民も参加\_\_トンガのダンス披露

集合写真（トンガポーズ）

【さよならパーティー】

■日時：8月10日（日） 15：00～17：00

■参加者：トンガ招へい者 11名、ホストファミリー受入先関係者など 30名、運営スタッフ理事 17名

■内容：次第別添

- ・ホストファミリーとゲーム、ニュースポーツ体験
- ・事業振り返り報告



佐賀市からの挨拶

万博交流の感想（トンガ高校生）

【東京：移動・文化体験】

■日時：8月12日 8：30～18：00

■参加者：トンガ招へい者11名、地球市民の会：大熊奨、実行委員：深川千幹

■内容：

- ・午前：佐賀空港から成田空港へ移動（ホームステイファミリーによる見送りを受  
け、最後の交流）
- ・午後：東京視察（浅草にて日本の文化を体験）



佐賀空港で見送り



最後の夕食、交流

【在トンガ王国日本国大使館 表敬訪問】

■日時：8月14日（木） 11：00～12：30

■参加者：トンガ招へい者5名（Siaosi Tupou, Mausa Halahala, Mila Ngaue,  
Kalisi Veikoso）

■面談者：稲垣駐トンガ王国日本国特命全権大使、中野書記官

■内容：

- ・万博交流プログラム参加（渡航）の報告



在トンガ大使館の表敬訪問

#### ④効果（トンガ王国招へい事業）

##### A. 市内への波及効果

本事業の取組が新聞・テレビ等のマスメディアに取り上げられたことにより、市民の間でトンガ王国の文化や歴史に対する関心が高まった。特に、「トンガ・フェスジャパン in Saga」やボランティアによるホームステイの取組は、市民がトンガの文化に直接触れる機会を創出し、参加者アンケートからも異文化理解の促進に寄与する結果が示され、佐賀市が目指す多文化共生社会の構築に繋がる効果をもたらしたことがうかがえる。

また、防災に関するワークショップや意見交換を通じて、特に青少年の防災意識や地域レジリエンスへの理解、協働意識及びコミュニケーション能力の向上が図られた。これにより、将来の地域を支える担い手となる青少年の人材育成に資する取組となった。

##### B. 実施により達成できた成果

気候変動や防災をテーマとした共同学習の場を提供することにより、双方がそれぞれの地域特性や課題について理解を深めるとともに、将来のレジリエントな社会の構築に向けたアイデアやプランの発表が行われ、防災分野における知の共有が図られた。

また、ホームステイや学校との異文化交流を通じて、相互の異文化理解及び人的交流が促進され、多文化共生社会の推進に寄与した。

##### C. 相手国への波及効果について

トンガ王国の高校生や参加した政府関係者等にとって、本市における学びや体験は、防災意識及び地域レジリエンスへの理解を深める機会となった。参加者は、帰国後、本事業で得た知見や経験を学校等において共有しており、トンガ王国内において、佐賀市の取組や自国の防災に対する関心及び意識の向上が図られている。

#### 4) 万博会期後の交流（11月）

万博会期後にオンラインにてトンガと佐賀市の交流を実施する。

##### 【オンライン交流】

■日時：11月15日（土） 10：00～11：20

■参加者：トンガ招へい者9名（Siaosi Tupou, Mausala Halahala, Mila Ngaue, 高校生5名）  
日本参加者10名（高校生：山田氏、ホストファミリー1組、佐賀市：南雲、末次地球市民の会：藤瀬、大熊、牧野、実行委員：深川、西依）

##### ■内容：

- ・交流での学びや感想の発表
- ・交流後の近況報告、今後に向けての協議等



### (3) 事業の目標に対する成果

#### 1) 目標①

「気候変動及び自然災害への対策」を、佐賀市とトンガ王国の青少年交流を通じて双方で学び合い、知の共有を行うことで、市民の環境、防災に関する意識が高まり、持続的かつ災害に強いまちづくりが推進される。

<成果>

#### ◎青少年の自然災害・防災・協働によるまちづくり意識の向上

佐賀市及びトンガ王国の高校生による防災ワークショップにおいて、気候変動及び災害に強いレジリエントなまちづくりをテーマに、共同でプランの検討及び発表を行った。これにより、双方がそれぞれの自然災害や防災に関する取組及び課題について理解を深めるとともに、地域課題の解決に向けて協働しようとする意識の醸成が図られた。

#### 2) 目標②

トンガ王国が力を入れている「ラグビー」や「伝統舞踊」などのスポーツ・文化交流を行うことで、市民の異文化理解が深まり、多文化共生社会が推進される。

<成果>

#### ◎市民の異文化理解の深化、国際的視点の拡大、コミュニケーションスキルの向上

学校訪問、トンガフェス、ホームステイ等を通じて、佐賀市における日常生活では触れる機会の少ないトンガ王国の文化に接する場を創出し、トンガ関係者と佐賀市民との交流が促進された。参加者アンケートの結果からも、文化や生活習慣の違いを前向きに受け止め、楽しみながら理解を深める様子が確認され、異文化理解の有効性が示された。

また、他国（異文化）との交流や各種ワークショップを通じて、外国人との円滑な意思疎通に必要なコミュニケーション能力の向上が図られた。

#### 3) その他の成果

- ◎トンガ王国との人脈形成
- ◎トンガ王国における佐賀市の知名度、魅力の向上

#### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

本事業の取組は駐日トンガ王国大使館から高く評価され、本事業の受託者である地球市民の会とトンガ王国との間で締結されている協力関係に関する覚書（MOU）の延長が前向きに検討されている。

これにより、佐賀市とトンガ王国との関係性は、佐賀市を活動拠点とする地球市民の会により、今後、防災や教育分野をはじめとする継続的な交流の促進が期待される。

#### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

本事業では、国際交流や防災・気候変動をテーマとした学びを通じて、佐賀市及びトンガ王国の青少年が国際的な視野を広げ、自身の将来や社会への関わりについて前向きに考える機会を提供した。

その結果、参加した青少年が将来の進路や社会参加に対し希望を持ち、主体的に挑戦しようとする意識の醸成につながるなど、将来に希望を感じさせる効果が発揮された。

<具体例>

- ・トンガ王国の高校生から将来日本に留学したいという声があがっている。
- ・ワークショップに参加した日本の高校生は、本事業参加者同士で「SDG s Quest みらい甲子園」という SDG s のアクションプランコンテストに申し込みを行っている。
- ・英語が世界とのコミュニケーションツールになることを実感し勉強の意欲が高まった。
- ・地球市民の会では、交流した子供達と気候変動等を課題としたトンガスタディーツアーの企画について前向きな動きがある。

#### (6) 特に良かった点、苦労した点

##### 1) 良かった点

本事業を通じて、佐賀市においてトンガ王国について理解を深めることができた。実際にトンガ王国からの来訪者と直接交流する機会を得た市民が、延べ約 600 名にのぼった。これにより、市民レベルでの国際理解及び人的交流の裾野が大きく広がった。

また、佐賀市の高校生にとっては、交流事業への参加にとどまらず、大阪・関西万博を訪問する機会も得られたことから、国際社会への関心を高め、将来を見据えて世界へと視野を広げる貴重な機会となった。

##### 2) 苦労した点

本事業の実施にあたっては、ビザ申請等の各種手続きについて、日本側からの遠隔での対応が必要であったことから、特に離島に居住する未成年の生徒にとっては、必要書類の準備等に一定の負担が生じた。しかしながら、トンガ王国教育訓練省、現地コーデ

イネーター及び在トンガ日本国大使館の協力を得ることで、全参加者が円滑にビザを取得することができた。

また、真夏の時期に実施した事業であったため、参加者の熱中症等の体調不良リスクへの配慮が必要であった。これに対し、適切な休憩時間の確保や体調管理への注意喚起等を行い、安全管理に十分留意しながらの事業実施となった。

## (7) 今後の展開

今後トンガ王国との交流は、本事業の受託者である地球市民の会を通して、共通の課題である気候変動や自然災害に強い持続可能な社会の実現に向け、オンライン等を活用した双方向の交流及び学びの機会を継続的に創出していくことを期待している。あわせて、今回交流を行ったトンガ王国の学校においては、地球市民の会が教育支援の一環として、気候変動教育や防災教育に関する取組の機会を提供していく予定である。

## (8) 今後の展開における課題

相手国との交流を継続的に実施していくためには、いくつかの課題が残されている。まず、オンライン交流を含む継続的な学習機会の設計及び運営に係る負担が大きい点である。日本、トンガ双方の学校行事や時差、通信環境の違いを踏まえ、無理なく継続可能な交流手法や実施頻度について検討していく必要がある。

次に、関係機関間における連携体制の明確化が課題である。今回の事業を通じて人的ネットワークは拡大したものの、今後の継続フェーズにおいては、学校、自治体、現地省庁、NGO等の役割分担を整理し、事業の持続性を担保するための実施体制を構築することが求められる。

また、財源の確保及び長期的な支援スキームの構築も重要な課題である。渡航費や交流プログラムの運営経費について、単年度の助成金に依存する形では継続が困難であることから、複数年度を見据えた計画的な財源確保や、地元企業、大学等との連携による新たな支援の可能性を検討していく必要がある。

さらに、交流の成果を地域全体へ波及させていくためには、参加した子どもたちの学びを周囲と共有し、次世代へとつなげる仕組みづくりが不可欠である。高校生による主体的な活動の芽が生まれている一方で、これらの取組を継続的に支えるため、大人側による伴走支援体制の強化を図り、事業成果のさらなる拡大を目指していく必要がある。

## 3-29 大分県竹田市×パラグアイ

### (1) 背景と目標等

#### 1) 背景と目的

竹田市は人口減少と少子高齢化が進む中山間地域であり、将来に向けた人材育成と地域活力の維持が課題となっている。本市は昭和48年にパラグアイ共和国サン・ロレンソ市と姉妹都市締結を行い、50年以上の交流の歴史を有するが、近年は交流が希薄化していた。

大阪・関西万博は姉妹都市との関係を再構築する好機であり、本事業はパラグアイ共和国ナショナルデーへの参加を通じて相互理解を深めるとともに、中学生を中心とした市民の国際的視野の拡大を図ることを目的として実施した。

#### 2) 目標

- ・姉妹都市サン・ロレンソ市との交流を再活性化し、継続的な関係構築につなげること。
- ・中学生を含む市民が国際舞台を体験することで、国際理解と主体性を育むこと。
- ・万博を契機に、本市の国際交流を持続的な取組へ発展させること。

### (2) 事業内容

#### 1) 事業名

大阪・関西万博（EXPO2025）

パラグアイ共和国ナショナルデー中学生等市民派遣事業

#### ① スケジュール（計画策定及び実施経過）

- ・令和6年10月 万博国際交流プログラム変更登録申請
- ・令和7年4月25日 抽選会及び第1回説明会実施
- ・令和7年5月10日 第2回事前学習会実施
- ・令和7年5月15日 出発式及び最終説明会実施
- ・令和7年5月18日～20日 大阪・関西万博派遣（2泊3日）
- ・令和7年6月 成果報告会実施

#### ② 体制

総務課市長室を主管課とし、教育委員会等関係部署と連携の上、市長を団長とする派遣団を編成。

派遣団は中学生10名、公募市民3名、市長、随任教職員及び市職員で構成。

在日パラグアイ共和国大使館と連携し、ナショナルデー式典及びパビリオン訪問を実施。

③ 内容

令和7年5月19日、大阪・関西万博夢洲会場にてパラグアイ共和国ナショナルデー式典に参加。

EXPO ナショナルデーホール「レイガーデン」での式典出席、コモンズB館パラグアイパビリオン訪問、大統領夫妻との交流を実施。

あわせて各国パビリオン（台湾館、ブラジル館等）を見学し、事前学習で学んだ内容を踏まえ国際理解を深めた。

| 令和7年度 内閣官房万博国際交流P中学生等派遣事業 日程表 |  |      |  |
|-------------------------------|--|------|--|
| 派遣先                           | EXPO2025 パラグアイナショナルデー  | 2泊3日 | 市長+中学生10名+随行教職員1名+公募市民3名+市職員1名 計16名<br>(竹田中3名・竹田南部中3名・緑中2名・直入中2名)  |
| 日                             | 年月日  | 曜日   | 旅費   |
| 1日目                           | 令和7年5月18日  | 日    | 移動: 竹田市役所 = 公用車 = 熊本空港 = ANA1626 = 伊丹空港 == リムジンバス == 新阪急ホテル(大阪梅田バス停) == 宿泊先(東急rei大阪)   |
|                               |  |      | 時刻: 8:30発 10:45着(昼食) 12:35発 13:40着 14:20発 14:50着 15:00発 15:30着   |
|                               |  |      | 内容: 移動: 宿泊先 == 大分県大阪事務所訪問 == 大阪駅構内自由時間 == 夕食 == 宿泊先(東急rei大阪)   |
| 2日目                           | 令和7年5月19日  | 月    | 時刻: 16:30~17:00  |
|                               |  |      | 内容: 宿泊   |
|                               |  |      | 移動: 宿泊先 == 梅田駅 == 大阪メトロ == 夢洲駅 == EXPO2025会場(パラグアイナショナルデー) == 夢洲駅 == 大阪メトロ == 梅田駅 == 宿泊先   |
| 3日目                           | 令和7年5月20日  | 火    | 時刻: 8:30頃発 10:00~19:00   |
|                               |  |      | 内容: 入場後、ドイツ館見学 → EXPOナショナルデーホール「レイガーデン」(11:00~12:00) → 昼食時間(自由散策) → コモンズB館内散策 → 「パラグアイパビリオン(大統領夫妻との交流)(14:10~14:20) → 各パビリオン等見学 など |
|                               |  |      | 移動: 宿泊先 == 東梅田 == 谷町四丁目 == 大阪城(刻印石の庭・天守閣見学) == 谷町四丁目 == 東梅田 == 宿泊先(荷物受取) == 梅田 ==  |
| 3日目                           | 令和7年5月20日  | 火    | 時刻: 8:00発 10:00~12:00 12:50~14:00 14:45発   |
|                               |  |      | 内容: 豊後岡藩 中川家の刻印石の庭見学 (昼食)  |
|                               |  |      | 移動: リムジンバス == 伊丹空港 == ANA527 == 熊本空港 == 公用車 == 竹田市役所   |
| 3日目                           | 令和7年5月20日  | 火    | 時刻: 15:15着 16:40発 17:50着 18:20発 20:30着   |
|                               |  |      | 内容: 移動: 宿泊先 == 東梅田 == 谷町四丁目 == 大阪城(刻印石の庭・天守閣見学) == 谷町四丁目 == 東梅田 == 宿泊先(荷物受取) == 梅田 ==  |
|                               |  |      | 時刻: 15:15着 16:40発 17:50着 18:20発 20:30着   |
| 備考                            | ・4月25日(金)18:30~20:30 抽選会及び第1回説明会<br>・5月10日(土)14:00~16:00 第2回説明会<br>・5月15日(木)19:00~20:30 出発式及び第3回説明会<br>・6月未定 成果報告会 |      | 問い合わせ先<br>竹田市総務課 課長:後藤 いずみ<br>担当:市長室長 森田 康之  |



(3) 事業の目標に対する成果

本事業の実施により、姉妹都市サン・ロレンソ市との関係を万博という国際的舞台のもとで再確認し、交流再活性化に向けた具体的な第一歩を踏み出すことができた。

特に、パラグアイ共和国大統領夫妻との直接交流を通じて、長年の友好関係を次世代へ継承する象徴的な機会となった。

また、中学生を中心とした市民が国際的な式典や各国パビリオンを体験したことで、国際理解の深化と将来的な人的交流の基盤形成につながる成果が得られた。

#### (4) 大阪・関西万博を契機としたレガシー創造への寄与

(大阪・関西万博閉会後の事業継続性・相手国との関係性の評価)

本事業は、大阪・関西万博という国際的な機会を活用し、長年交流のあった姉妹都市サン・ロレンソ市との関係を再確認し、再活性化の契機とすることができた点に意義がある。

ナショナルデーへの参加および大統領夫妻との交流を通じ、両市の友好関係が次世代へと継承される象徴的な機会となった。

万博会期後においても、オンライン交流や将来的な中学生派遣の実施等を視野に入れ、人的交流の再構築を進めることで、姉妹都市交流を持続的な取組へと発展させていく基盤が形成された。

#### (5) こどもにとって将来に希望を感じさせる効果の発揮

中学生がパラグアイ共和国大統領夫妻と直接交流し、自らスペイン語で歓迎の言葉を伝えるという経験は、国や立場を超えて思いが通じることを実感する機会となった。

また、各国パビリオンで未来社会の取組や多様な文化に触れたことで、世界は遠い存在ではなく、自らの努力次第で関わるができるものであるとの認識が醸成された。

参加者の感想においても、「将来海外と関わる仕事に就きたい」「外国語を学びたい」などの前向きな意欲が見られ、将来への希望や自己成長への意識向上につながった。

#### (6) 特に良かった点、苦勞した点

##### 1) 良かった点

パラグアイ共和国ナショナルデーへの参加により、大統領夫妻との直接交流が実現し、姉妹都市交流の歴史を次世代へ継承する象徴的な機会となった。

また、中学生が主体的に準備し、本番でスペイン語による挨拶を成し遂げたことは、参加者の大きな自信につながった。

##### 2) 苦勞した点

限られた期間の中で事前学習や調整を行う必要があり、特に大統領との面会時間や警備体制等について直前まで調整を要した。

また、万博会場の混雑や移動手段の確保など、円滑な運営のためのロジスティクス面で配慮が必要であった。

## (7) 今後の展開

本事業を契機として、姉妹都市サン・ロレンソ市との交流を段階的に再構築していく。今後はオンライン交流の実施や、将来的な中学生の相互派遣を視野に入れ、教育分野を軸とした人的交流を継続していく。

あわせて、総務課市長室を中心に関係部署および市民団体と連携し、行政主導に依存しない持続可能な交流体制の構築を図る。

## (8) 今後の展開における課題

万博という契機を通じた交流が終了した後、交流を継続的な取組として定着させるための安定的な財源確保と実施体制の維持が課題である。

また、距離的制約を踏まえ、オンラインと対面交流を組み合わせた効率的な交流モデルの確立が必要である。

さらに、参加した中学生の経験を市全体へ波及させ、国際交流を市民全体の取組として広げていく仕組みづくりが求められる。

## 第4章 成果の分析

### 4-1 成果の5分類

本事業では、大阪・関西万博を契機として、地方公共団体と海外の国・地域との間で多様な国際交流の取組が実施された。これらの取組は、文化交流、教育交流、産業・経済分野の連携、住民参加型イベントなど、その内容や形態は多岐にわたっている。一方で、各地域において生まれた成果を整理・分析すると、個別の事例の違いを超えて、地方創生の観点から共通する成果の方向性が見られた。

そこで本報告書では、実施された取組全体の成果を横断的に整理し、地方創生への寄与という視点から分析を行った結果、成果は主に5つの類型に分類する。この5分類は、単に事業の実施結果を列挙するものではなく、国際交流が地域にもたらした意識の変化、行動の変化、関係性の変化、そして制度・仕組みの変化を総合的に捉えたものである。

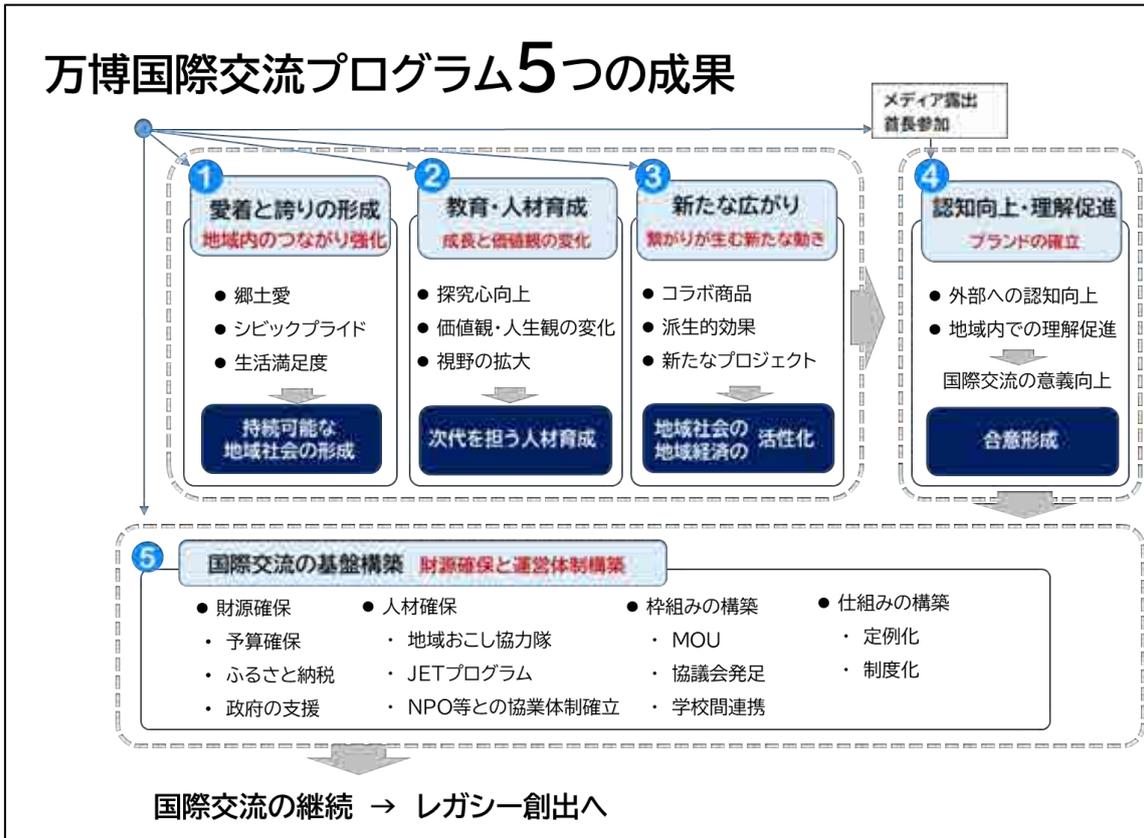
具体的には、第一に、国際交流を通じて地域の文化や価値が再認識され、住民の郷土愛やシビックプライドが高まるといった「愛着と誇りの醸成」に関する成果が確認された。第二に、こどもや若者を中心とした学びや体験を通じて、探究心や価値観に変化が生まれ、将来を担う人材の成長につながる「教育・人材育成」の成果が見られた。第三に、国際交流を契機として、地域内外の多様な主体が結びつき、新たな活動やプロジェクト、派生的な取組が生まれるなど、「新たな広がり・つながりが生む新たな動き」が確認された。

第四に、メディア露出や対外的な発信、首長や行政トップの関与を通じて、地域の認知度や評価が高まり、国際交流が地域ブランドの確立につながる「認知向上・理解促進」の成果が現れている。

そして第五に、こうした取組を一過性のイベントにとどめることなく、継続的な国際交流へと発展させるための財源確保、人材確保、連携枠組みや運営体制の整備といった「国際交流の基盤構築」に関する成果が各地で確認された点も重要である。

これら5つの成果は、それぞれが独立して存在するものではなく、相互に関連し合いながら地域に波及している点に特徴がある。たとえば、住民の誇りや愛着の醸成が次の活動への主体的な参画を促し、それが新たな連携や取組を生み、結果として地域の認知向上や制度的な基盤整備につながるといった好循環が見られる。

以下の各節では、この成果の5分類それぞれについて、具体的な事例や変化をもとに詳細な分析を行い、地方創生にどのように寄与したのかを明らかにしていく。



(全体概念図)

### 4-1-1 愛着と誇りと形成

本事業を通じて確認された成果の一つとして、国際交流を契機に、地域に対する愛着や誇り（シビックプライド）の醸成が挙げられる。多くの自治体において、海外との交流が単なる対外的な活動にとどまらず、地域住民が自らの地域の文化、歴史、産業、暮らしの価値を改めて見つめ直す契機となっていた。

国際交流の場では、地域の伝統芸能や文化、日常の暮らし、地域資源などが「相手国に伝える対象」として整理・発信される。その過程で、住民自身が「自分たちの地域の強みや魅力とは何か」を言語化・再認識する機会が生まれた。これにより、これまで当たり前とされてきた地域の文化や風土に対する評価が高まり、「自分たちの地域に誇りを持つ」「この地域特有の価値がある」という意識の醸成につながった。

また、交流事業には、自治体職員、学校関係者、地域団体、住民、企業など、多様な主体が関わるケースが多く見られた。これまで接点の少なかった人々が国際交流という共通の目的のもとで協働することで、地域内のつながりが強化され、地域コミュニティとしての一体感が生まれた点も重要である。こうした協働を通じた体験は、地域に参与す

る意識を高め、地域活動への主体的な参画を促す効果をもたらしている。

さらに、万博を契機とした大きな舞台や、海外からの関係者の来日、万博会場内でのナショナルデーイベント等の特別な機会を通じて、地域の取組が注目される経験は、住民にとって強い印象を残す「特別な体験」となった。これらの体験は、感動や達成感と結びつき、地域に対する肯定的な感情を高める要因となっている。結果として、「この地域に住み続けたい」「この地域に関わり続けたい」といった心理的变化が生まれ、将来的な定住志向や関係人口の拡大につながる基盤が形成されつつある。

このように、「愛着と誇りの形成」は、数値で測定できる成果ではないものの、地域社会の持続性を支える重要な内面的成果である。国際交流を通じて育まれた地域への誇りや愛着は、次なる挑戦や新たな取組への原動力となり、他の成果（新たな活動の創出、認知向上、基盤構築等）を生み出す土台として機能している。地方創生の観点から見ても、こうした内発的な意識変化は、地域の将来に向けた持続的な発展を支える重要な成果であると評価できる。



400名を超える河内長野市民がEXPO会場内のステージでパフォーマンス（大阪府河内長野市ホームページより）

#### 4-1-2 教育・人材育成

本事業における国際交流の取組は、こどもや若者を中心とした教育・人材育成の面においても顕著な成果をもたらした。学校交流、出前授業、共同学習、万博関連イベントへの参加など、実体験を伴う交流を通じて、参加者の学びに対する姿勢や価値観に変化が見られた点が特徴である。

多くの自治体では、海外の国や地域と直接関わる機会を通じて、参加者が異文化や異なる社会背景に触れ、「もっと知りたい」「理解を深めたい」という探究心や学習意欲の高まりが確認された。特に、教科書や座学だけでは得られない実体験としての国際交流は、

学びを自分事として捉えるきっかけとなり、主体的な学習姿勢を育む効果を発揮している。

また、異文化との出会いは、自らの地域や生活を相対化して捉える視点を生み出し、「自分は何者か」「自分が暮らす地域にはどのような特徴があるのか」といったアイデンティティーの形成や地域に対する理解の深化につながった。こうした経験は、参加者にとって単なる一時的な体験にとどまらず、将来の進路選択や生き方を考える上での重要な契機となっている。

さらに、国際交流の場では、年齢や立場、国籍を超えて人と協働する機会が多く生まれた。共同での発表やイベントの運営に取り組む経験は、「人と協力して何かを成し遂げる」成功体験や達成感をもたらし、協働・共生を重視する価値観の形成に寄与している。これらの体験は、将来にわたり社会と関わりながら生きていくための基礎的な素養として、参加者の内面に蓄積されていると考えられる。



大阪市の加美北小学校とバブアニューギニアの Sogeri 小学校がナショナルデーで共演

このような教育・人材育成の成果は、短期的には意識や行動の変化として現れ、中長期的には地域を担う人材の育成につながる重要な成果である。地方創生の観点から見ても、国際交流を通じて育まれた探究心、主体性、協働性、広い視野は、将来的に地域内外で活躍する人材を創出する土台となり、地域の持続的な発展を支える要素として高く評価できる。

### 4-1-3 新たな広がり

本事業を通じて実施された国際交流の取組は、既存の枠組みにとどまらず、地域内外において新たなつながりや活動の広がりを生み出した点に大きな特徴がある。交流を契機として、多様な主体が関係を築き、その関係性が新しい動きへと発展していることが各地で確認された。

具体的には、自治体、学校、地域団体、企業、NPO、住民など、これまで必ずしも接点のなかった主体同士が、国際交流を共通のテーマとして結びついた。こうしたつながりは、一過性の交流事業にとどまらず、新たなイベントや共同プロジェクト、継続的な活動へと派生している。国際交流が「目的」ではなく、「次の取組を生み出すきっかけ」として機能した点は、本事業の重要な成果である。

また、異文化との交流を通じて、地域資源や文化、技術、産業が新たな視点で捉え直され、新しい価値の創出につながった事例も見られた。海外の視点や海外からの反応を受けることで、地域の魅力が再解釈され、新商品や新たな表現方法、教育プログラム、発信手法などが生まれている。これらは、国際交流が地域にイノベーションをもたらす契機となり得ることを示している。

さらに、国際交流を通じて形成された人と人とのつながりは、地域内に閉じない広がりを持ち、他の自治体や地域との連携、さらには次年度以降の新たな交流構想へと発展している。自治体単独では実現が難しかった取組が、ネットワークの強化により可能となるなど、交流の広がりが新たな行動を生み出す好循環が生まれている。

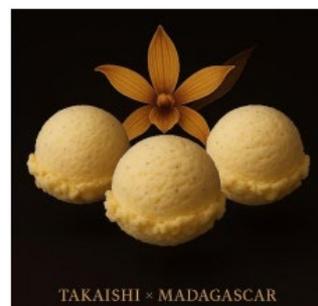
このような「新たなひろがり」は、短期的な成果としてだけでなく、地域の将来に向けた可能性を広げる点に意義がある。国際交流を通じて生まれたつながりが、次なる挑戦や継続的な活動へと発展することで、地域の選択肢や活動領域が広がり、結果として地方創生の取組の厚みを増すことにつながっている。

以上のことから、本事業における「新たなひろがり（つながりが生む新たな動き）」は、国際交流を起点として地域に変化をもたらし、他の成果（愛着と誇りの形成、教育・人材育成、認知向上、基盤構築）を促進する役割を果たす重要な成果であると評価できる。

#### 4-1-4 認知向上・理解促進

本事業における国際交流の取組は、地域の内外に対する認知向上および理解促進という面においても、明確な成果をもたらした。万博という国際的な注目度の高い舞台を背景に、各地域の取組が可視化されたことで、地域の存在や魅力がこれまで以上に広く発信される機会が創出された。

多くの自治体では、国際交流の取組が新聞、テレビ、ウェブメディア、SNS 等を通じて紹介され、地域外に向けた情報発信が強化された。こうした報道や発信は、単なるイベント紹介にとどまらず、地域の文化や住民の活動、地域らしさを伝える内容として取り上げられるケースも多く、結果として地域の知名度や社会的評価の向上につながっている。



大阪府高石市ホームページ  
より  
マダガスカル産バニラビーンズを利用したジェラード

また、対外的な認知向上と同時に、地域内での理解促進が進んだ点も重要な成果である。メディア報道や万博関連イベントを通じて、国際交流の取組が広く共有されることで、住民の間においても「なぜ国際交流に取り組むのか」「地域にどのような波及効果があるのか」といった理解が深まり、共感や支持が広がった。これにより、国際交流が関係者だけの活動ではなく、地域全体の取組として認識されるようになっていく。



三島村ホームページより  
ギニアのナショナルデーでシャンベの演奏を披露。多くのメディアに取り上げられた

さらに、地域の首長等が国際交流事業に直接関与し、その成果を体感したことにより、国際交流を地域政策の一環として捉え直す意識変容が見られた。首長自らが万博会場内の公式式典や交流の場に参加し、地域の反応や変化を目の当たりにすることで、国際交流の意義が再認識され、継続的な取組や次の施策に向けた判断につながった点も、本事業の重要な成果である。

このように、国際交流を通じた認知向上・理解促進は、地域のイメージや評価を高めると同時に、地域内外の住民に「その地域らしさ」を共有する役割を果たしている。地方創生の観点から見ても、こうしたブランドの確立は、関係人口の拡大、外部との新たな連携、さらには継続的な交流や投資を呼び込む基盤となるものであり、本事業がもたらした重要な成果の一つであると評価できる。

#### 4-1-5 国際交流の基盤構築

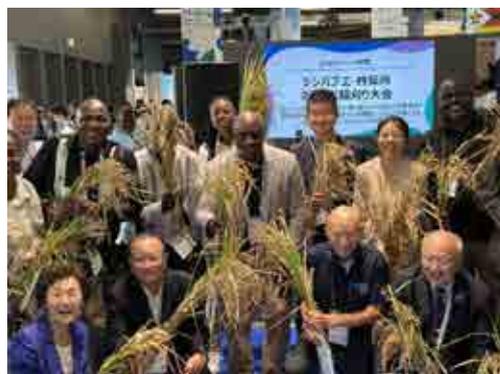
本事業を通じて、国際交流を継続的な取組として展開していくための基盤構築に向けた成果が各地で確認された。国際交流を一過性のイベントとして終わらせるのではなく、次年度以降の展開や将来の継続を見据えた動きが、一定の広がりをもって現れている点が本事業の特徴である。

国際交流のイベント等の実施に向けた財源確保の面では、国の補助事業を活用した取組を起点として、自治体内で国際交流を継続的に位置づける検討が進んだ事例が見られた。事業を実施した経験を通じて、国際交流を地域施策として捉える視点が共有され、次年度以降の予算措置や関係機関の支援事業等の活用に向けた議論が始まるなど、継続に向けた基盤形成の動きが確認されている。

人材面においても、自治体職員に加え、学校関係者、地域団体、民間事業者、NPO 等、多

様な主体が国際交流に関与する体制が形成された。これにより、国際交流が特定の担当者のみで担われるものではなく、地域全体で支える取組として認識されるようになった点は重要な成果である。事業を通じて得られた知見や経験は、今後の取組に活かされる人的資産として蓄積されつつある。

また、相手国や関係機関との間で、覚書 (MOU) の締結や学校間連携、継続的な協議の枠組みづくりに向けた動きが生まれた自治体もあり、国際交流を支える関係性がより発展・深化する兆しが見られた。こうした枠組みは、国際交流を継続・発展させていく上での重要な基盤となるものである。



杵築市の取組杵築市の取組。

万博会場において実施したネリカ米の収穫祭の様子。ジンバブエからの JICA 研修生を杵築市へ招聘する取組について、次年度以降を見据えた予算確保が進められている。

さらに、国際交流を定例的に実施することや、成果を振り返り次につなげる意識が自治体内に共有されるなど、運営面においても「仕組みづくり」に向けた意識の変化が確認された。事業を実施した経験そのものが、国際交流を持続的に行うための前提条件を整理する機会となっており、今後の展開に向けた土台が形成されたと評価できる。

このように、本事業を通じて、財源、人材、関係性、運営の各側面において、国際交流の基盤構築に向けた成果が段階的に積み重ねられた。地方創生の観点から見ても、これらの成果は、万博を契機とした国際交流を将来へとつなげていくための重要なレガシーの一部を形成するものであり、今後の継続的な取組の基礎として位置づけられる。

## 4 - 2 成功要因

本事業を通じて、万博国際交流プログラムが地域に定着し、万博会期後も継続・発展する取組へとつながった背景には、以下の成功要因が確認された。

### (1) 国際交流の意義の明確化と地域課題との接続

国際交流を「交流そのもの」を目的とするのではなく、地域活性化、教育、人材育成、産業振興、関係人口創出等の具体的な地域課題の解決手段として位置づけたことが、国際交流を推進する大きな原動力となった。

交流の意義が明確であった自治体では、住民や関係団体の理解と協力を得やすく、予算

確保や継続的な交流につながっている。

## (2) 首長等の積極的なコミットメント

地域の首長等が国際交流の意義を理解し、首長自ら現場に関与した自治体では、調整が円滑に進み、国際交流の取組に対する優先度が高まった。

首長が国際交流を「地域政策の一環」として位置づけたことにより、自治体内の部局横断的な連携や、次年度以降の継続的な取組への合意形成が促進された。

## (3) 推進役となる人材・組織の存在

自治体職員、民間事業者、NPO、教育機関など、強い熱意と実行力を持つ「推進役」の存在が、国際交流の質と持続性を大きく左右した。

特に、地域に根差した民間団体や市民団体が主体的に関与した事例では、行政依存型ではない自走的な交流モデルが形成されている。

## (4) 民間主体を活かした官民連携体制

行政がコーディネート役・支援役に徹し、民間事業者や地域団体が主体となって交流を展開したことで、以下の波及効果が生まれた。

- ・地域産業との接続
- ・新たなビジネスやプロジェクトの創出
- ・交流の継続性向上

相手国側にも明確なカウンターパートが存在したことが、対等で実務的な関係構築につながっている。

## (5) 持続可能性を見据えた仕組みづくり

国際交流を一過性のものとして終わらせないため、財源・制度・人材の面での仕組みづくりが重要な成功要因となった。

具体的には、通常予算措置、ふるさと納税、企業からの協賛、国や関係機関の支援制度の活用、MOU の締結や協議会の設置などにより、担当者変更後も継続可能な体制が構築された。

## (6) 地域全体への波及効果を意識した交流設計

こども、学校、住民、企業など多様な主体が関わる交流設計とすることで、以下の効果が確認された。

- ・地域内での理解促進
- ・郷土愛やシビックプライドの醸成
- ・関係人口の拡大

交流の成果を「見える化」し、地域内外へ発信したことも、評価と共感の広がりにも寄与している。

### 4-3 今後に向けた課題

本事業を通じて、大阪・関西万博を契機とした国際交流が、地域住民の意識変化や学びの深化、地域の魅力再発見など、地域活性化に資する多面的な効果を生み出すことが確認された。一方で、こうした取組を万博会期中にとどめることなく、万博閉幕後もレガシーとして継続・発展させていくためには、いくつかの課題への対応が必要である。

第一に、国際交流を持続的な取組として定着させるための実施体制の強化と仕組みづくりが挙げられる。現状では、熱意ある自治体担当者や外部人材等の尽力により国際交流が推進されている事例も多く、自治体担当者の異動や関係者の交代により取組の継続性が損なわれる可能性がある。今後は、自治体内部の複数部局による連携体制の構築や、教育機関、民間事業者、地域団体等との協働関係を明確に位置づけることで、属人的な運営から移行し、国際交流を継続する体制づくりが求められる。

第二に、中長期的な視点に立った財源確保の検討が課題である。国の補助事業による実施段階から、万博閉幕後の自走化を見据え、自治体予算への位置づけや、企業からの協賛、ふるさと納税、関係機関の支援制度の活用など、複数の財源を組み合わせた運営モデルを検討していく必要がある。そのためにも、事業の成果や効果を整理し、将来に向けた展開の方向性を明確にしていくことが重要である。

第三に、国際交流の意義や成果について、自治体内および地域住民への浸透を図っていくことが重要な課題として挙げられる。国際交流が関係者や参加者に限られた取組として受け止められるのではなく、地域全体の将来につながる施策であるという共通認識を形成していくことが求められる。そのためにも、交流の目的や成果を分かりやすく発信するとともに、学校教育や地域行事、広報媒体等を通じて、住民が国際交流を身近に感じることができる機会を継続的に創出していく必要がある。

さらに、交流相手国との関係性についても、単発的な訪問やイベントの実施にとどまらず、共通のテーマや課題を軸とした継続的な関係構築を進めることが重要である。交流内容を深化させることで、相互理解の向上のみならず、教育、人材育成、産業、地域づくりといった分野への波及が期待される。

今後は、これらの課題を踏まえつつ、各自治体が地域の特性や課題に応じた国際交流の位置づけを明確にし、大阪・関西万博を契機とした取組を、将来にわたって地域を支えるレガシーとして定着させていくことが求められる。

## 4-4 今後の展望

本事業を通じて、国際交流が地域にもたらす多様な効果や可能性が明らかになる一方で、継続的な取組とするためには、財源および人材の確保が共通の課題として浮き彫りとなった。今後は、万博を契機に生まれた関係性や成果を一過性のものに終わらせず、地域に根付いたレガシーとして定着させるため、以下の観点から取組を深化させていくことが重要である。

### (1) 多様な財源を組み合わせた持続可能な運営の展開

今後の展開においては、単年度予算や補助事業の活用から移行し、複数の財源を組み合わせた持続可能な運営体制の構築が求められる。具体的には、国の補助金・委託事業の活用に加え、ふるさと納税を通じた財源確保や、企業版ふるさと納税、民間企業による協賛・参画など、地域の実情に即した財源の多様化が有効である。

また、JICA 事業や関係機関の国際交流・地域活性化関連施策等を段階的に活用することで、事業の発展フェーズに応じた資金確保が可能となる。こうした支援策を戦略的に組み合わせることで、万博会期後も国際交流を継続・発展させる基盤を整備していくことが期待される

### (2) 人材の確保と「推進役」の育成・定着

国際交流事業を継続的に推進する上では、行政内部の担当者のみならず、地域内外の多様な人材を巻き込んだ体制づくりが不可欠である。今後は、地域おこし協力隊や JET プログラム等を活用し、国際交流や地域づくりに関心を持つ人材を地域に呼び込み、実務面での推進役として位置付けていくことが有効である。

加えて、地域 NPO、民間事業者、教育機関等との協業体制を構築することで、行政の負担軽減と事業の専門性・実行力の向上が期待できる。特定の個人に依存するのではなく、複数主体が関与する体制とすることで、担当者の異動等があっても取組が継続される仕組みづくりが重要となる。

### (3) 枠組みの制度化と事業の定例化

今後は、万博を契機に構築された相手国・関係機関との関係性を、覚書 (MOU) の締結

や協議会の設置等を通じて制度的な枠組みへと発展させることが望まれる。これにより、交流内容や役割分担が明確化され、国際交流の継続性と再現性が高まる。

さらに、学校交流や人材交流、文化・産業分野での取組を定例化・制度化することで、国際交流を地域政策の一部として位置付け、計画的かつ中長期的に展開していくことが可能となる。

#### (4) 万博レガシーとしての自立的展開に向けて

これらの取組を通じて、国際交流は「万博会期中の特別な取組」から、「地域恒例の活動」へと移行していくことが期待される。財源、人材、枠組み、運営体制の4つの要素を段階的に整備することで、自治体が主体となり、自立的に国際交流を継続・発展させる好循環が生まれる。

今後は、本事業で得られた知見やモデルを他の自治体へ横展開するとともに、地域の実情に応じた形で応用していくことで、万博の成果を全国各地に波及させ、持続可能な国際交流のレガシー創出につなげていく。

## 第5章 アンケート結果

本章では、万博国際交流プログラムに参加した各自治体において実施されたアンケート結果を整理し、参加者の意識変容や学習効果、国際交流に対する態度の変化を分析する。

アンケートは主に児童・生徒を中心に実施され、一部自治体では教職員・地域住民も対象とした。設問は、交流への満足度、相手国への理解度・親近感の変化、今後の交流意欲、学びの活用意向等で構成されている。

本分析では、単なる満足度や評価にとどまらず、地方創生や人材育成の観点から、国際交流がもたらしたアウトカムに焦点を当てて整理する。

### 5-1 回答から得られた主な傾向

#### ■ 交流への満足度は総じて高水準

多くの自治体で相手国との交流に対して「満足」「とても良かった」といった回答が大半を占めており、体験型・対話型の交流は参加者にとって肯定的に受け止められている。

特に、万博会場内での発表や国歌斉唱、共同ワークショップの実施など“当事者として関わる機会”は評価が高かった。

#### ■ 相手国へのイメージの転換が顕著

多くの回答で、「貧困・紛争のイメージが変わった」「発展していない国だと思っていたが違った」「怖い・遠い国から、身近な国へ変わった」など、固定的・表層的なイメージから、具体的で立体的な理解への転換が確認されている。

これは本事業の重要な成果であり、単なる知識の習得ではなく、認識構造の変化が生じている点が特徴的である。

#### ■ 「世界」と「地元」の再発見

特筆すべき点として、「自国・自地域の価値を再認識した」「ゼロ・ウェイストや伝統文化への誇りが高まった」など地元を世界基準で考える視点が得られたといった回答が複数自治体で確認されている。

国際交流が「外を見る機会」であると同時に、「自分たちの地域を再定義する機会」となっていることが明らかである。

#### ■ 将来志向・行動意欲の向上

多くの自治体で、「もっと交流したい」「英語を学びたい」「将来国際的な仕事をしたい」

「世界の文化をもっと知りたい」など、継続的な学習意欲・行動意欲の向上が確認された。これは短期的なイベントの効果を越えた、中長期的な人材育成への波及効果を示唆するものである。

### ■ 地方創生への示唆

教員や地域関係者の自由記述には、「関係人口拡大への期待」「地域資源の国際的発信の可能性」「若者の郷土愛醸成」といった記述も見られ、国際交流が教育施策にとどまらず、地域ブランディングや将来的な国際展開の基盤形成に寄与していることが読み取れる。

### ■ まとめ

アンケート結果を横断的に見ると、本プログラム「[異文化理解の深化]」「固定観念の払拭」「郷土への誇りの再発見」「将来志向の醸成」という四つの効果を各地で生み出している。万博という国際的契機を活用しながら、地方自治体が主体となって実施した本事業は、教育的成果と地域的成果を同時に創出するモデルとなっていると評価できる。

## 5-2 アンケート結果一覧

| 自治体名               | アンケート結果まとめ   |
|--------------------|--|
| 青森県三戸町<br>(ヨルダン)   | <p>アンケートで提出された感想文からは、「中東は危険というイメージがあったが、出会ったヨルダンの方々はとても優しかった」といった固定観念の変化が確認された。</p> <p>また、「世界には知らない国が多いことに驚いた」「SDGsを達成するにはジェンダー平等が不可欠だと分かった」など、世界課題への理解の深化が見られる。</p> <p>さらに、「将来は医療に関わりたい」「三戸町の良さを改めて感じた」「三戸が好きだと実感できた」といった将来志向や郷土への誇りの高まりも記されており、国際交流を通じた認識転換と行動意欲の醸成が確認されている。</p> |
| 群馬県富岡市<br>(ミクロネシア) | <p>アンケートでは、回答者の79%が今後もミクロネシアとの交流や関係強化を望むと回答している。</p> <p>また、交流イベントを通じて「新しい人に出会う」機会が生まれ、地域内にとどまらないつながりの広がりが実感されたとの記載がある。</p> <p>子どもたちにとっては、相手国の文化や歴史に直接触れ、英語でのコミュニケーションを経験したことにより、海外を身近に感じ、グローバルな視点を持つ契機となったと整理されている。国際交流を自分事として捉え、継続的な関係を望む意識の醸成が確認された。</p>                         |

|                            |  |
|----------------------------|--|
| <p>群馬県甘楽町<br/>(ミクロネシア)</p> | <p>アンケートでは、ミクロネシアと甘楽町の祭事に共通する「飲み物を共有し平和や繁栄を願う」という文化的背景への理解が深まり、双方の伝統行事を重ね合わせて捉える視点が得られたことが示されている。</p> <p>また、質疑応答や試飲・試食を通じた交流により、相手国を遠い存在ではなく具体的な文化を持つ国として実感したとの記載がある。</p> <p>交流を契機に、国際理解を一過性の体験にとどめず、今後の関係発展を期待する意識が醸成されたと整理されている。</p>                                       |
| <p>千葉県横芝光町<br/>(ベリーズ)</p>  | <p>料理体験やプレゼンテーションを通じて「国際交流を実感できた」「今後も他国の文化に触れる交流事業を継続してほしい」との意見が寄せられている。</p> <p>また、学生交流イベントでは、生の英語に触れる「インタビューゲーム」を通じて英語への関心や学習意欲の向上が見られ、将来の進路選択として国際交流を視野に入れる契機となったことが示されている。</p> <p>さらに、国際理解やグローバルな視点を持つ重要性、多文化共生社会づくりへの意識が高まったとの回答もあり、外国人を身近な存在として捉える意識変容が確認された。</p>       |
| <p>東京都渋谷区<br/>(トルコ)</p>    | <p>トルコ派遣での振り返りの記載からは、防災をテーマとしたプレゼンテーションをトルコで実施し、現地職員や学生から直接意見を受けた経験が、防災に対する意識の再向上や課題を多角的に捉える視点の獲得につながったことが読み取れる。</p> <p>また、英語や通訳を介した対話を通じて異なる文化・価値観を理解しようとする姿勢が生まれ、国際的な視野で物事を考える意識の醸成が図られたと整理できる。</p>  |
| <p>東京都渋谷区<br/>(ペルー)</p>    | <p>ペルーを「遠い南米の国」という抽象的な存在としてではなく、歴史・文化・社会課題を持つ具体的な社会として捉える認識への転換が見られた。</p> <p>特に、スポーツや日本語教育、日系人社会との交流を通じて、言語や文化の違いを越えて人と人がつながる実感を得たこと、また先入観に気づき、多面的に相手国を理解しようとする姿勢が育まれたことが記されている。</p> <p>さらに、通訳や発表、意見交換を主体的に担う中で、自らの語学力や積極性への自信が高まり、日本とペルーをつなぐ存在として関わり続けたいという将来志向も示されている。</p> |

|                                |   |
|--------------------------------|---|
| <p>富山県南砺市<br/>(トリニダード・トバゴ)</p> | <p>アンケートでは、「もっといろいろな国のことを知りたい」「国際交流のイベントがあれば参加してみたい」といった声が多く寄せられている。</p> <p>万博会場でのこきりこワークショップでは、海外楽器との初のコラボレーションを経験し、多くの観覧客から拍手を受けたことが、伝統芸能を未来につないでいく担い手としての自覚や誇りにつながったことが記されている。</p> <p>また、学校訪問では「言葉が通じなくても音楽で交流できる」ことへの気づきが共有され、異文化理解を身近な体験として視点の広がりが確認された。</p>             |
| <p>石川県志賀町<br/>(アゼルバイジャン)</p>   | <p>アゼルバイジャンに派遣された生徒からは、「初めての海外滞在はすべてが新鮮で刺激的だった」「今後も国際交流に積極的に関わっていききたい」といった意欲の高まりが読み取れる。</p> <p>また、アゼルバイジャンのみならず「様々な国の文化や風習を知りたい」「多くの国を訪れてみたい」との希望が示され、視野の拡大が確認された。</p> <p>さらに、外国人住民の暮らしへの関心が高まり、地域内での共生を意識する姿勢も見られる。国際体験を通じて、学習意欲の向上と地域社会へのまなざしの変化が生まれている。</p>                |
| <p>福井県<br/>(ブラジル)</p>          | <p>地元学生へのアンケートでは、「グローバルな視野が育まれた」「異文化理解が深まった」との意見が寄せられ、特に「ブラジルや福井村に興味をわいた」「もっと彼らを知りたくなった」といった声を確認されている。直接顔を合わせて交流することが、相手国への関心を高める有効な手段であることが示された。</p> <p>また、日系ブラジル人太鼓部メンバーからは、日本で多くの人に演奏を届けられたことや、大学との交流を通じて自らのルーツである福井県の魅力を実感できたとの声があり、文化的アイデンティティの再認識と将来への意欲の高まりが読み取れる。</p> |
| <p>三重県<br/>(ブラジル)</p>          | <p>「居住する三重県について理解を深めることができた」「国際交流の重要性への理解が高まった」といった意見が寄せられている。</p> <p>また、ブラジルパピリオン館長との意見交換を通じて、母国ブラジルと三重県との歴史的なつながりを再認識したとの声も見られた。</p> <p>さらに、「三重県のことを好きになった」との回答もあり、自らのルーツと現在の居住地の双方を肯定的に捉える視点の形成がうかがえる。</p> <p>万博訪問を契機に、国際社会の中で自らの立場を考える意識の醸成が確認された</p>                     |

|                           |  |
|---------------------------|--|
| <p>滋賀県<br/>(ブラジル)</p>     | <p>アンケート（ブラジルパビリオンでのお茶の試飲体験交流イベント来場者対象）では、「ブラジルに対するイメージが変わった」「遠い国だと思っていたが身近に感じられた」といった認識の変化が示されている。また、ブラジル文化や日系社会の歴史に触れ、日本とのつながりを具体的に理解できたとの回答も見られた。体験や対話を通じて異文化への関心が高まり、ブラジルについてさらに知りたいとの意向が示されるなど、来場者にとって相手国理解を深める機会となったことが確認されている</p>   |
| <p>京都府<br/>(チリ)</p>       | <p>府民公開講座（参加者 50 名）のうち 25 名から回答があり、回答者の 76%（19 名）が、本事業を「価値のある取組である」と評価している。また、本事業を通じて国際的な取組や活動への関心が高まったと回答した参加者が多数を占めた。さらに、「今後も継続すべきである」との意見が多く寄せられ、「子どもたちにも伝えていきたい」との声も複数見られた。限られた規模ではあるが、国際理解の促進および将来世代への波及可能性が示された内容となっている</p>  |
| <p>大阪府<br/>(アラブ首長国連邦)</p> | <p>本事業における大阪府×UAE の取組は、ドバイ政庁長官の万博を契機とした訪問をはじめとする要人との公式交流を中心としたものであり、一般参加型の交流事業とは性質を異にしている。そのため、参加者の満足度や意識変容を把握することを目的としたアンケート調査の実施は、本事業の内容や対象に照らして適当ではないため、アンケートは実施していない。</p>  |
| <p>大阪府大阪市<br/>(ブラジル)</p>  | <p>5・6 年生ともに、本学習が「ブラジルを知るために役に立った」と回答した児童が多数を占めていることが確認できる。<br/>また、印象に残った授業として「サンバ発表」「ブラジルデイ」「サッカー交流」等が多く挙げられており、体験的な活動が強く記憶に残っている様子がうかがえる。<br/>さらに、「生活の中でブラジルのことを考えるようになった」とする回答も一定数見られ、「外国のことをもっと調べたい」「外国の言葉を学びたい」「日本のことを外国の人に伝えたい」等、今後の行動につながる選択肢を選ぶ児童が多いことが示されている。<br/>加えて、「これからブラジルの人と関わりを持ちたい」と回答した児童も過半数を占めており、交流への前向きな意識の形成が確認できる。</p> |

|                               |  |
|-------------------------------|--|
| <p>大阪府大阪市<br/>(ペルー)</p>       | <p>ペルー料理の試食や文化紹介、ダンスの鑑賞などを通じて、ペルーの文化や魅力について知る機会となったことが読み取れる。</p> <p>また、普段接する機会の少ないペルー料理を体験できたことや、在日ペルー大使館関係者による説明を受けたことが印象に残ったとの記載がある。</p> <p>交流イベントを通じて、ペルーに対する理解や関心が深まった様子がうかがえる。</p>  |
| <p>大阪府大阪市<br/>(ボリビア)</p>      | <p>「生活の中でボリビアのことを考えるようになった」との回答が過半数を占め、今後についても「外国のことをもっと調べたい」「困っている人や立場の違う人の気持ちを考えたい」「世界の人々のためにできることを考えたい」といった選択肢を選ぶ児童が多い。</p> <p>さらに、「これからボリビアの人と関わりを持ちたい」との回答も多数を占めており、学習を通じて相手国への関心と継続的な関係を志向する姿勢が形成されていることが読み取れる。</p>  |
| <p>大阪府大阪市<br/>(パプアニューギニア)</p> | <p>多くの児童が本学習を通じてパプアニューギニアへの理解を深めたと認識していることが読み取れる。</p> <p>また、体験的な活動が強く印象に残っているとの回答が多く、実際に見聞きし体を動かす学習が国理解を具体的なものとして捉える契機となっていることがうかがえる。</p> <p>さらに、「生活の中でパプアニューギニアのことを考えるようになった」とする回答や、今後も外国について調べたい・関わりを持ちたいとする選択が一定数見られ、相手国を一過性の話題ではなく継続的な関心対象として捉える意識の形成が確認された。</p> |
| <p>大阪府堺市<br/>(ヨルダン)</p>       | <p>アンケート結果からは、「もっとヨルダンについて知りたい」「ヨルダン／ヨルダンバビリオンに行ってみたい」「ヨルダン以外の国や自国の文化についてもこれから調べてみたい」といった回答が多く見られた。</p> <p>これらの結果から、特別授業を通じてヨルダンへの関心が高まるとともに、他国や自国文化へと視野を広げる意識が形成されたことが読み取れる。</p> <p>国際理解を契機に、もっと学習意欲が育まれたことが確認できる。</p>  |

|                               |  |
|-------------------------------|--|
| <p>兵庫県西宮市<br/>(ソロモン諸島)</p>    | <p>アンケートでは、「プログラムを通じて環境について学習したことで、自然環境を将来世代に守り伝えていくために、個人として貢献できる方法を考えるきっかけとなった」「自国の人たちともこの成果を共有し、意識を高めたい」といった意見が示されている。</p> <p>これらの回答から、環境学習が知識の習得にとどまらず、自身の行動や地域への還元を意識する契機となったことが読み取れる。</p> <p>また、実際に学校や地域で行動に移しているとの報告もあり、意識面と行動面の双方に変化が生じていることが確認されている。</p>  |
| <p>和歌山県有田市<br/>(アラブ首長国連邦)</p> | <p>アンケート(令和7年12月実施・ドバイ派遣生20名対象)結果からは、「海外の文化への理解が深まった」「日本とUAEの文化の違いを実感できた」との項目に全員が肯定的に回答しており、異文化を体感的に理解する機会となったことが読み取れる。</p> <p>また、「自分から進んで行動する力が高まった」「将来の夢や目標に影響を与えた」「将来海外で学んだり働いたりしてみたいと思うようになった」といった項目でも前向きな回答が多く、研修が主体性の向上や将来志向の形成に影響を与えていることが示されている。</p>   |
| <p>鳥取県<br/>(ジャマイカ)</p>        | <p>料理教室では、「食を通じた国際理解は年齢を問わずできてよい」「ジャマイカへ行ってみたい」「知らない国を知るきっかけになった」との声が寄せられており、食文化体験が相手国への関心喚起につながっていることが読み取れる。</p> <p>また、青少年交流では、「英語が苦手な緊張したが交流できて楽しかった」「英語をもっと学びたいと思った」との感想が示されており、実際の対話経験が語学習得や異文化コミュニケーションへの意欲向上を促していることが確認できる。</p> <p>ビデオ交流においても、先輩から続く交流の歴史を調べたり、パトワ語を取り入れるなど主体的な行動が見られ、継続的な関心の形成がうかがえる。</p> |
| <p>広島県北広島町<br/>(ドミニカ)</p>     | <p>「ドミニカ共和国に興味があった」「国際交流に興味があった」との動機を持って参加した生徒が多く、参加後には「期待以上のことが得られた」との回答が最多であったことが示されている。</p> <p>また、「今後同様の事業があれば友人に勧めたい」との回答が多数を占めていることから、体験が自身の中で価値あるものとして位置づけられたことが読み取れる。</p> <p>ナショナルデーでのプレゼンテーションや現地文化の観覧を通じ、ドミニカ共和国との交流を具体的に実感し、国際交流への関心をより強める契機となったことが確認できる。</p>  |

|                          |   |
|--------------------------|---|
| <p>徳島県上板町<br/>(ヨルダン)</p> | <p>児童がヨルダン国歌を歌えるようになるなど関心の深化が具体的に示されている。</p> <p>また、阿波藍がヨルダンで活用される事例に触れたことで、自地域の文化が国際的に評価されていることを実感し、地域文化への誇りが醸成されたことが読み取れる。</p> <p>さらに、ヨルダン関係者との対話を通じて、英語を「想いを伝えるツール」として捉え直す機会となり、語学学習や異文化理解への意欲が高まったと整理されている。</p> <p>これらから、交流が主体的な学びへとつながっていることが示された。</p>  |
| <p>香川県<br/>(ブラジル)</p>    | <p>来県した日系ブラジル人へのアンケートでは、「日本や香川県への興味・関心が高まった」と全員が回答しており、短期研修を通じて母県への関心が確実に喚起されたことが示されている。</p> <p>また、「各国を一度に体験できたことに刺激を受けた」「様々な国の文化や技術への興味が高まった」との意見も記載されており、万博参加を含む一連の体験が視野の拡大につながったことが読み取れる。</p> <p>さらに、自由意見では「県人会と香川をつなぐパイプ役になりたい」「もう一度香川県に来たい」といった将来的な関与を志向する声も示されており、交流を契機に継続的な関係構築への意識が醸成されていることが確認できる。</p>           |
| <p>香川県<br/>(パラオ)</p>     | <p>アンケート（直島中学生）では、交流会を通じて全員がパラオへの興味・関心が高まったと回答している。また、「実際に行って観光をしたり、パラオの友達と話をしてみたい」との感想も見られ、交流を契機に相手国を具体的な存在として捉え、自らの行動として将来的な訪問や対話を志向する意識が生まれていることが確認できる。</p> <p>さらに、うどん交流会に参加したパラオの高校生からも「日本の食文化を直接体験できてうれしい」「自分でもまた作ってみたい」との声があり、体験を通じて異文化への理解と挑戦意欲が高まっている様子が示されている。双方にとって、実体験を伴う交流が新たな関心と行動意欲を生む契機となっていることが読み取れる。</p> |

|   |  |
|---|--|
| <p>福岡県<br/>(フィジー)</p>                     | <p>本取組は、フィジー共和国青年スポーツ大臣をはじめとする訪問団の招へいを中心とした公式交流であったため、アンケートは実施していない。代わりに、事業終了後に自治体担当者へ事務局がヒアリングを実施した。</p> <p>ヒアリングでは、フィジー側が日本とのスポーツ交流に前向きな姿勢を示し、今後は具体的な交流事業へ発展させたいとの意向が確認された。また、継続的な関係構築に向け、将来的には連携協定の締結も視野に入れているとの見解が共有された。</p>   |
| <p>福岡県福岡市<br/>(アラブ首長国連邦・カタール・サウジアラビア)</p> | <p>「中東の文化や価値観を直接理解することができた」「現地の富裕層市場の可能性を具体的に感じた」との声が記載されている。また、「ハラル対応やプライベート性の高い体験の重要性を実感した」「従来のインバウンド対応とは異なる視点が必要だと感じた」との意見も見られ、実地視察を通じて受入環境整備の具体的な課題を把握したことがうかがえる。</p> <p>さらに、「将来的な商品造成につなげたい」「継続的な関係構築が重要」との記述もあり、事業化を意識した前向きな姿勢が形成されていることが読み取れる。</p>                            |
| <p>佐賀県佐賀市<br/>(トンガ)</p>                   | <p>アンケートでは、「トンガは遠い国だと思っていたが身近に感じられるようになった」「災害への備えを自分たちも考えたいと思った」といった記述が見られ、相手国への心理的距離の縮小と、防災を自分事として捉える意識の形成が確認できる。</p> <p>また、「文化や考え方の違いを知ることができた」「もっと英語を勉強して話せるようになりたい」との声もあり、異文化理解の深化に加え、語学学習など具体的行動へと接続する意欲が生まれている。</p> <p>交流体験が認識の変化にとどまらず、次の行動を志向する段階に至っていることが読み取れる。</p>         |
| <p>大分県竹田市<br/>(パラグアイ)</p>                 | <p>参加した学生の感想からは、事前学習やスペイン語学習を経て大統領夫妻に直接挨拶した経験が、生徒に強い達成感と自信をもたらしたことが読み取れる。特に「緊張したが伝えられた」「将来は外国語を学びたい」といった記述から、挑戦を通じた自己効力感の向上が確認できる。また、各国パビリオン見学を通じて「世界をもっと知りたい」「将来の選択肢が広がった」との記載があり、国際理解の深化と進路意識への波及も示唆される。さらに、他校生徒との協働や集団行動を通じて協調性の学びに言及する声もあり、本事業が主体性・社会性の涵養に資する機会となったことが読み取れる。</p> |



## 第6章 成果発信・広報の取組

### 6-1 自治体通信を活用した成果発信

本事業の成果発信の一環として、自治体の首長・職員・議員等を主な読者層とする専門媒体「自治体通信」(2025年9月特別号)において、万博国際交流プログラムの特集記事を掲載した。

#### 6-1-1 実施概要

- ・ 媒体名 : 自治体通信 (2025年9月特別号)
- ・ 発行形態 : 紙媒体およびWEB掲載
- ・ WEB掲載期間: 2025年10月~2026年2月
- ・ 主な読者層 : 自治体首長、幹部職員、議員等
- ・ 送付対象 : 全国自治体の首長あてに送付

紙媒体による直接送付と、WEBによる継続掲載を組み合わせ、首長層への到達と情報の持続的発信を図った。



#### 6-1-2 目的 (狙い)

本媒体への掲載は、万博国際交流プログラムの制度周知に加え、国際交流を地域政策の文脈で位置づけ直す視点を提示することを狙いとしたものである。

第一に、事業の制度趣旨と自治体の実践をあわせて発信することで、国際交流を「地域課題解決の手段」として捉える考え方を共有することを意図した。

第二に、万博を契機とした一過性のイベントとせず、会期後の継続や制度的基盤構築までを見据えた取組であることを明確に示すことを狙いとした。

第三に、首長および自治体幹部層に直接届く媒体特性を活かし、自治体内での政策検討や合意形成に活用されることを期待した。特に、全国自治体の首長あてに送付することで、首長自身に国際交流の政策的意義を理解いただく機会とすることを意図した。

### 6-1-3 掲載内容

誌面では、万博国際交流プログラムの制度概要（交流計画登録数 154 件、登録自治体 95 団体）、会期前・会期中・会期後の 3 段階による取組設計、自治体自らが交流計画を策定する仕組み等を紹介し、制度の全体像と趣旨を整理した。

制度の説明にとどまらず、「国際交流を目的化しない」という基本姿勢や、こどもを中心とした人材育成、地域産業やシビックプライドとの接続といった政策的観点も示した。

あわせて、内閣官房国際博覧会推進本部事務局次長へのインタビュー記事を掲載し、本プログラムの制度設計の背景と狙いが示された。主な発言は以下のとおりである。

- ・ 万博は多くの国・地域が集う国際的機会であり、これを地域活性化や人材育成につなげる契機とすることが重要である。
- ・ 国際交流自体を目的とするのではなく、地域ビジョン達成のための手段として活用する視点が求められる。
- ・ こどもにとって国際交流は代えがたい学びの機会であり、将来を担う人材育成の観点からも意義がある。
- ・ 交流を一過性の取組で終わらせず、「会期前」「会期中」「会期後」の 3 段階で継続的に取り組む制度として設計している。
- ・ さらに、北海道浦幌町、山形県遊佐町、富山県南砺市、和歌山県有田市の首長インタビューを掲載し、各自治体が国際交流を地域課題とどのように接続しているかを紹介した。
  
- ・ 北海道浦幌町：独自の教育課程「うらほろスタイル」を基盤とし、マリ共和国との交流を通じて、こどもたちの郷土理解と国際的視野の拡大を図る。国際交流を教育とまちづくりの延長線上に位置づける考えが示された。
- ・ 山形県遊佐町：高校存続という地域課題を背景に、マダガスカルとの交流を通じて若者の国際感覚を醸成し、将来的な海外人材受入れも視野に入れた持続可能な地域づくりを目指す姿勢が示された。
- ・ 富山県南砺市：伝統文化を万博の舞台で発信することにより、こどもたちの郷土への誇りを育み、「万博のレガシー」を地域に根づかせたいとの考えが語られた。
- ・ 和歌山県有田市：産業構造転換期にある地域において、UAE との交流を通じて国際的視野を持つ人材を育成し、将来的な産業振興や持続可能なまちづくりにつなげる狙い

が示された。

- ・ これら5名の発言を通じ、国際交流を教育、人材育成、産業振興、地域アイデンティティ形成等と接続する多様なアプローチを紹介し、各地域における取組の方向性を示唆する内容とした。

#### 6-1-4 万博国際交流プログラム「成果報告会」

本事業の成果発信の一環として、「万博国際交流プログラム 成果報告会 ― 地方創生の観点からみた自治体の取組共有 ―」を令和8年2月17日にオンライン形式で開催した。

#### 6-1-5 実施概要

開催日 : 令和8年2月17日(火) 13:30～15:30

開催形式 : オンライン(ウェビナー形式)

対象者 : 本事業に取り組んだ自治体およびその関係者

主催 : 内閣官房(事務局:近畿日本ツーリスト)

##### 【プログラム構成】

第1部 事業実績のまとめと成果の分析

第2部 事例紹介

第3部 支援策・制度の紹介

なお、本報告会で使用した資料は、内閣官房ホームページに掲載。

#### 6-1-6 目的(狙い)

第一に、内閣官房より交流自治体数や登録件数等の実績を報告するとともに、「成果の5分類」に基づく分析結果を共有することで、万博国際交流プログラムが各地域にもたらした成果や変化を体系的に整理し、地方創生の観点からその意義を可視化・共有することを目的とした。

第二に、自治体による具体的な取組事例を通じ、国際交流を「地域課題解決の手段」として位置づける実践のあり方を共有することを狙いとした。

第三に、万博会期後の継続や展開を見据え、自治体等が活用可能な支援策・制度を紹介することで、今後の制度接続や体制構築に向けた具体的示唆を提示することを意図した。

#### 6-1-7 実施内容

第1部 事業実績のまとめと成果の分析

内閣官房より交流計画登録数、参加自治体数、交流規模等の実績が報告され、続いて事務局より「愛着と誇りの形成」「教育・人材育成」「新たな広がり」「認知向上・理解促進」「国際交流の基盤構築」の5分類に基づく成果分析が示された。これにより、個別事例を超えた成果の構造化が図られた。

## 第2部 事例紹介

### ・ 上板町 × ヨルダン

地域の象徴「藍染」を核にした国際交流

～教育・文化継承・シビックプライドを高める取組～

地域の象徴「藍染」を核に、文化継承・担い手育成・学校教育の充実を国際交流と接続。

JICA 事業申請、MOU 締結、相手国予算活用等、財源確保や体制構築が進展し、首長を含む地域内の理解が深化した点が特徴として示された。

### ・ 八尾市 × リベリア

民間主導の官民連携による国際交流モデル

～多様な主体を結集し、産業・教育・関係人口に波及～

国際交流を地域活性化戦略の中に位置づけ、産業振興・担い手育成・関係人口拡大へ波及。商工会、教育委員会、中小企業、行政部局、外部機関等による「地域コンソーシアム」が形成され、官民連携モデルとしての取組が示された。

### ・ 遊佐町 × マダガスカル

高校存続に国際交流を活用した中山間地域の教育モデル

～マダガスカルからの留学生受入れに向けた体制整備～

高校存続という地域課題に対し、国際交流を教育魅力化の手段として活用。協働活動を通じた行動変容が見られ、留学生受入れや地域おこし協力隊登用構想など、継続に向けた体制整備が進展していることが報告された。

## 第3部 支援制度の紹介

万博国際交流プログラムは本年度をもって終了するが、国際交流を「地域づくり」「教育振興」「産業振興」といった政策分野と接続して捉えることで、既存の国・関係機関の支援制度を活用しながら継続・発展させる可能性が示された。

報告会では、内閣官房より、今後活用が期待される制度として、JET プログラム、地域おこし協力隊、CLAIR 等による支援制度等が紹介された。これらは単独で活用するだけでなく、教育分野・人材育成分野・産業振興分野など、各自治体の政策目的に応じて組み合わせることで、国際交流を持続的な取組として展開することが可能であることを示唆した。

## 第7章 まとめ（総括）

本調査は、2025年大阪・関西万博を契機として、日本の地方公共団体と中東、中南米、大洋州島嶼地域との間に、地域活性化に資する持続的な国際交流をいかに構築し得るかを明らかにすることを目的として実施したものである。とりわけ、万博会期中のみならず万博会期後も継続する「レガシー」としての国際交流の可能性を検証した。

本調査を通じて明らかになった最大の成果は、国際交流が単なる文化紹介や一過性のイベントにとどまらず、教育、人材育成、地域産業、住民意識、行政体制といった多面的な領域に波及効果をもたらし得る点である。特に、学校教育やこどもを中心とした交流は、異文化理解の促進に加え、学びへの意欲や探究心の向上、将来の進路や価値観に影響を与える「原体験」となり得ることが確認された。これは、万博が掲げる「未来社会の実験場」という理念を、地域レベルで具体化する重要な取組である。

また、地域資源や既存の強み（文化、スポーツ、産業等）を核とした交流設計は、住民の郷土愛やシビックプライドの醸成につながり、地域内の合意形成や主体的な参画を促進する効果を持つことが示された。首長の関与や民間事業者・市民団体の主体的な参画、さらには大使館や国際機関との連携が進むことで、国際交流が地域政策の一部として位置づけられ、予算措置や制度設計に向けた動きが生まれた点も重要な成果である。

一方で、持続的な交流を実現するためには、人的リソースの確保、調整役となる推進主体の存在、財源確保や枠組みづくりといった基盤整備が不可欠であることも明らかとなった。これらが不十分な場合、担当者の異動や周囲の環境の変化等により取組が停滞するリスクが高い。したがって、国際交流を「事業」ではなく「仕組み」として地域に根付かせる視点が求められる。

本調査で得られた知見は、中東、中南米、大洋州島嶼地域に限らず、先進国を含めた他の地域との国際交流にも応用可能であり、地方創生と国際交流を結び付ける再現性の高いモデルとして横展開が期待される。大阪・関西万博を起点として生まれたこれらの取組が、万博会期後も各地域において発展・定着し、日本全体の国際的な関係人口の拡大と、次代を担う人材育成につながることで強く期待される。